

アジアと女性解放

Asian Women's Liberation

アジアの女たちの会

連絡先:

東京都渋谷区桜丘町14-10渋谷コープ211号 400円

特集・第三世界の女と私たち

■各国での闘いから

フィリピンのシスターたち 台湾・獄中の呂秀蓮

香港の女子労働者 タイのスラム活動家

インド・強姦反対闘争 韓国・光州の無名の女たち

米国の日系三世女性 南アの人種差別の中で

■コペンハーゲン女性会議

—— 私たちの視点から ——

■マニラ・観光問題会議報告



闘うイランの女たち

No.9

1980.12

女性差別・民族抑圧からの解放をめざして!

第三世界の女と私たち

私たち日本の女が第三世界を旅し、あるいはコペンハーゲン会議などを感じるのには、第三世界の女たちの力強さである。二本の足をふんばって大地に立っているような存在感——。因習、伝統、宗教、文化の呪縛に忍従をしいられ、今また多国籍企業の経済侵略、性侵略の犠牲となり、何重もの差別の壁に囲まれている。それ故、第三世界の女たちは、女性解放という視点だけではなく、民族解放、階級闘争、民主化運動など、社会変革を目ざす運動の担い手として、独裁政權や多国籍企業を相手に戦わざるをえない。

彼女たちのエネルギーを伝えたいという思いにかられ、そしてまた、私たち日本の女が彼女たちとどうつながっているのだろうか、自らに問いかけながら、この特集を組んだ。

アジアという鏡に日本の姿をうつし出すと、日本の女には二つの像がある。一つは日本の経済侵略を支え、その分け前にあずかっている姿であり、もう一つは日本社会で抑圧されている姿である。

日本経済の高度成長は、物を享受することが幸福なのだという消費文化をつくりだし、女性を家庭の中で物を買う消費者に仕立てあげる。このような消費文化が他のアジアの国々へ輸出され、アジアの人々の生活をより先鋭な形でゆがめ収奪している。

日本の女として、私たちは浪費的な生活の質を変え、同時に生命をみだす性暴力女におしつけられる差別・抑圧と戦いたい。

今、私たちが国内でとりくんでいる運動を着実に積みあげてゆくことが、第三世界の女たちと共通の敵に立ち向う連帯をつくりだす。

私たち日本の女は、差別されているがゆえに、世界の女たちと痛みや怒りや優しさを共有できる。

一九八〇年十二月

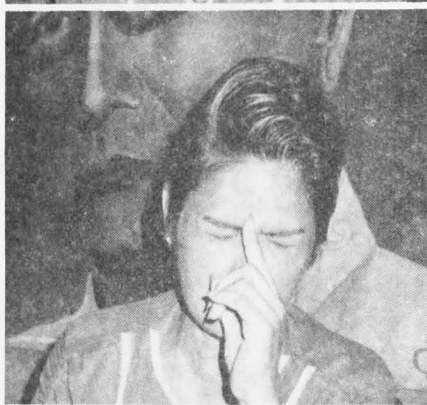
アジアの女たちの会

虎のように強く……

——フィリピンのたくましい女たち——

松井やより

スラムの活動家 シスター・ミリン



初めて訪れたフィリピンで素晴らしい女たちに出会った。タイでも、マレーシアでも、アジアの国々を旅すると、女たちの強さ、たくましさを感じるが、フィリピンでも、何より深く心を動かされたのは、やはり「パワフル」(力強い)としが形容できない女たちであった。

マニラのナボタス漁港の近くに広がるスラムで会ったシスター・ミリンと呼ばれる女性も、まさに、そんな女性の一人である。マニラ湾の夕日が美しい口ハス大通りの、高級ホテルが立ち並ぶツーリストベルトから、私たち観光問題ワークショップの参加者たちは、ジブニー(乗り合いジープ)で、ナボタスへ向かった。雨期で水びたしの道路を抜けて、ナボタスのノース・ベイ・パリオに着いた。

十一家族がひしめき合って住んでいる仕立家の家に案内され、長男のカルロス青年が、ナボタスの人々と闘いについて話してくれた。漁港の港湾労働者の組織、青年たちの組織、母親たちの組織などがいくつもできていて、貧困からの解放を求めて、活動が続いているという。

日本の漁船が魚をとってしまう

「われわれにとって、最大の外敵は日本です。日本の大漁業会社が性能のよい大きな漁船を送り込んで、フィリピンの小さな漁船を押しつけて魚をとってしまうんです」とカルロス青年はいつた。ナボタスに日本の漁業基地を建設する計画が進められ、すでに、外国船のための漁港の機械化が、港湾労働者の反対を押し

切って強行されていた。

「ナボタスで、日本帝国主義との闘争にまず立ち上がったのは母親たちだった。七四年、日本の東洋建設の、近代漁港建設工事に反対して彼女たちが抗議行動の先頭に立った。そのリーダーが、シスター・ミリンで、彼女は今もナボタスのさまざまな組織の連合体の委員長をつとめています。ナボタスの女性たちは強いですよ」と、同夜、シスター・ミリンを連れてきてくれた。

五十歳というのに、真赤なブラウスに、大柄のチェックのスカートという派手を装いなのに、まぎびくりました。スラム住民のリーダーというイメージとはあまりにも違っていた。口を開くと、まるで、機関銃のようにまくしたてるすさまじい迫力に圧倒された。

「私は二回も牢獄にぶちこまれたんです」と話はすさまじい投獄体験から始まった。七七年一月、熱を出して寝ているときに連行され、約二百人の刑事犯の中で、ただ一人の女性として拘留されたが、どんなにひどい拷問を受けたか、彼女は思い出すのもつらそうに目をつぶり、顔をゆがめて語った。(写真下段)

全裸の拷問にめげず

「買春観光は許せない、女の怒りを行動に」と、11月29日、アジアの女たちの会主催の「買春観光に反対する集会」が、東京八重洲口の国労会館で開かれ、五百人近い参加者が会場にあふれた。ツルのマークに恥という字を背景にした舞台上、会員によるスライドつきの実態報告や寸劇を行なったあと、「恥を知れ、買春観光」「世界に評判悪いよ、日本の男性」「お父さん何しに行くの?」などのプラカードを手手に手に銀座の繁華街をデモ行進した。



「組織の関係者の名前をいえと、私の髪をつかんで、頭を壁にぶつけられたけど、私は絶対に口を割らなかつた。すると、暗い部屋に連れて行かれて全裸にされ、二十四時間、丸太のようなもので殴られ通してした」と今でも、脚に残っている傷あとを見せてくれた。「私が気分が悪くなつてぐったりすると、何か薬を飲まされ、病院へかつき込まれました。しかし、目も耳ももうろうとなり、一時間後に、声も出なくなつたんです。今でも、頭が痛くなり、毎週医者に通っている状態です。」

七九年に再び逮捕され、こんどは政治犯扱いで、拷問は受けなかつたが、一日わずか四ペソ（百二十円）の食料しか支給されず、ひもじかつたという。「政治犯の中には十年間も裁判も受けずに拘束されている人



立ち退きを迫られているトロヤン地区の人々

もいて、驚きました。ひどい人権侵害をこの目で見たわけですが、家もなく、職もないスラムの人々も人権を奪われています」と、彼女がなぜ戦闘的なスラム活動家となつたかを語った。

「私は、あるカトリック団体に入りしていたので、修道女ではないのに、みんながシスター・ミリンと呼んでいたんです。一九七四年、ナボタスで二回火事が起こり、私の家も焼けました。千何百世帯が焼け出され、四人の子どもを含め、七人が焼け死んだのですが、これは明らかに放火と思われました。その直後に、東洋建設が住民が反対していた漁港工事を始めたわけなんです。それで、泥水が流れ込んできて、まさに火攻め、水攻めだと、黙っていられなくて、私たち母親二百人が泥を袋につめ、東洋建設に押しかけたわけなんです。」

政府と日本企業相手の彼女の闘いはこうして始まった。「教会や修道院の中で、ただ祈っているだけで、現実を目をつぶっていることはできないと思つたのです。苦しんでいる人々が目の前にいるのに、自分だけいい家に住んで、おいしいものを食べる生活をするわけにはいきません。問題が現にあるのですから、人々が団結して闘えば解決します。」——苛酷な現実が一人の平凡な母親を闘

士に変えたのである。

左手に赤ん坊、右手で投石

「私の家の裏の五軒の家に、四十家族がひしめいていたのですが、七八年、十七人の母親が強制立ち退きに抵抗したんです。左手で赤ん坊を抱き、右手で石を拾って投げ始めました。警官や消防も、手のつけようがないぐらい、捨て身の抵抗を試みたのです。外国人の会議を開くために、なぜ、私たちフィリピン人が、不法占拠者だから出て行けと追い立てられなければならないのか。外国人のために、住む家も奪われて、苦しまなければならぬのか……」——彼女は涙声になっていた。

「私は開発そのものに反対しているのではないんです。世界銀行や外国企業やそれにつながる金持ちたちが、スラムの貧しい人々が利用されることがゆるせないんです。漁港だつて、フィリピンの漁民のためではなく、外国のためですよ」

マニラ四百万市民の三分の一がスラムに住むという。彼らは農村で生活できなくて、やむなくマニラに流れて来て、公有地に掘立小屋を建てて住みついているのだ。スラムスクウォーター（不法占拠者）として、強制立ち退きをいつ迫られるかわか

らない不安定な生活を強いられている。水の上なら追い立てられずにすむと、海べり、川べりの水面に張り出すように家を建て、子どもたちが落ちて水死するという痛ましい事故も珍しくないという。

シスター・ミリンたちは、近くのトロヤン地区二十八世帯二百人が、道路づくりのために強制立ち退きを迫られているので、「代替住宅をよこせ」と闘争している最中だった。「家を失うことは、港や魚市場での仕事を失うことになるので、生活でなくなることを意味するんです」——

昼間、雨の中を訪ねたトロヤンの人々の暗い表情が思い浮かんだ。「私も、七年間がんばってきたので、そろそろ引退したらと娘たちはいうんです。でも、私はまだやるつもりです。人々の苦しみを思うと、神はいるのだらうかと問うこともありますが、とにかく、解放のために闘う一生を選んだ以上、やり通します」と自分にいい聞かせるようにいった。「フィリピンの女性として思うんですが、母親であれば、わが子だけでなく、すべての子どもにも責任を感じなければいけない。子どもが危険にさらされているのに、母親はどうして目をつぶっていられるでしょう。母親は虎のように強くなければならぬと思います。私は、母

親たちと一緒に活動していますから、恐れませんか。——あるときは目をつぶり、あるときは両手を拡げて、胸の思いを伝えようと語り続ける。

「私たちが戦わなければ、私たちの地域は、外国人のための工業地域としてとられてしまい、生きる手だてを失ってしまうでしょう。なぜ、私たちは食べられないのか、と話すのですが、みんな外国に盗まれてしまふからですよ」——ナボタスには、政府とアジア開発銀行が作成した開発基本計画があり、その中に、日本の漁業関係者のための施設を作るプランが含まれていることがわかつたという。この計画は絶対に阻止すると、ミリンは闘志を隠さなかつた。日本人として何をなすべきかを考えさせられながら、彼女の一時間以上の熱弁に耳を傾けたのだつた。

スラムで闘うシスターたち

最もしいたげられたスラムの人々と共に生活している活動家の中に、カトリックのシスターが何人もいた。ツーリスト・ベルトと呼ばれる歓楽街のマビニ通りから歩いて十分ほどのスラムで、シスターたちが暮らしていた。一人は、七七年、マレーシアのペナンで開かれたアジア女性フォーラムで「今苦しんでいる人々



マニラの街頭で薬草を売る女たち

さに、「人民の中へ」を實踐していた。カトリックは、歴史的には、権力支配層と結んで、民衆を抑圧する役割を果たしてきたことは否めないが、そのカトリック内部から、民衆のための活動家が輩出し、数多くのシスターたちが、マニラのスラムだけでなく、農村や工場地帯や辺地で、解放運動に献身している。その一端にふれることができたのである。

観光問題を討議したマニラでの「観光問題ワークショップ」の五人のフィリピン代表のうち三人が女性で、それぞれ素晴らしい活動をしていった。その一人はやはりシスターで、「イボン」(鳥)というミニコミ誌を出しているグループの中心メンバーだった。エネルギーの固まりという感じで、ワークショップでも、観光問題特集号を片手に「日本人観光客がフィリピンに来て、もうけるのは日本の旅行会社、航空会社、日系ホテル、日本人ガイド、日本人売春クラブ経営者と、それに便乗したフィリピンの金持ちだけ」と、観光が開発途上国の経済にプラスになるという神話を打ち砕いた。

あるデパートの裏の、看板も出していない「イボン」の事務所私を招いたシスターは「私は、日本の民衆を非難してんじゃないんです。それどころか、日本の闘う女性たち

の情熱に感銘を受けています。みなさんが集めた買春観光のデータを活用させてもらっているわけで、これからも、お互い緊密に情報を交換し合つて、買春観光反対運動を強めましょう。」と、私の手を固く握るのだった。

ホスピタリティ・ガールの友として

フィリピン代表のもう一人の女性はあるプロテストタントの活動家で、ホスピタリティ・ガールの中へ入って、孤独と不安を慰める地道な活動が始めていた。「田舎から出てきて、外国人相手に働いている女たちは、まだ十代の子どもも多く、やはり淋しいんですね。二カ月に一度のピクニックなんかを楽しみにしているんで、私も一緒に参加して、彼女たちの友だちになるよう努力しているんです。夜の歓楽街に入入りしていることなど、家族にも内緒の活動ですが、彼女たちの痛ましい生活を知ると、逃げ出すことはできません」——目をうるませ、肩に垂れる長い髪をかき上げながら静かに語った姿が思い浮かぶ。同胞女性の痛みをわが痛みとされているのだった。

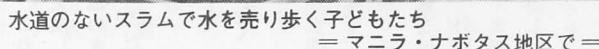
売国的観光政策への怒り

述べた。それは、とりもなおさず日本
の経済侵略、性侵略との闘いを意
味していると思った。

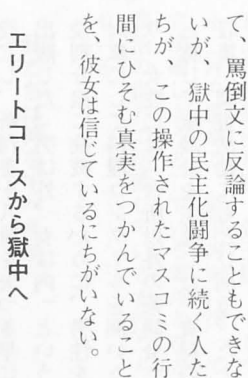
巨大な力を向こうに回しての困難
な闘いだが、多くのフィリピン女性
が戒厳令下の弾圧にもめげず参加し
ているのだ。「たとえ、勝利をすぐに
かちとることはできなくても、闘わ
ないよりは、闘って敗れる方がまだ
ましです」——私たちをナボタスに
連れて行ってくれたスラム活動家の
女性が洩らした言葉が深く心に残っ
ている。

マニラ買春観光を
取材して思うこと

水道のないスラムで水を売



里美佳保



今年三十六才の呂秀蓮は、小さな店を商なう両親と兄一人、姉二人の一家の末子として、国民党支配下の台湾に育った。台湾の名門、台北一女から台湾大学法律系司法クラスに首席で入学し大学院に進む。一九六九年にアメリカ、イリノイ大学大学院に二年間留学し、帰国後、行政院法規委員会科長として、保健法や公害法をつくるために四年間働いた。持ち前の才気とガンバリズム、上昇

志向に支えられ、国民党の有能な官僚としてエリートコースを歩んでいた彼女が、なぜ獄中に到るまでの別な道を行くようになったのだろうか。この道は、女性として感じた差別に對する素朴な怒りを「新女性主義」の運動へと具体化していった道と重なる。

呂秀蓮は両親、兄妹の愛にはぐくまれのびやかに生長した。それでも「男だったらよかったのに」と両親がもたす繰り言を聞いた。どうして女だったらいけないのか。自分で女に生まれてきたわけでもないし、生んだのは両親なのに。それに男にできないことが女にできないはずがない。ごくあたりまえの、しかし世間では、まだ反逆心という言葉で表わされる心意気を、彼女は幼ない頃から持っていた。小学生の頃、出張した先生の代講をしたので、同級生は「小先生」とよんだというエピソードからもわかるように、誰にも負けたくないという自信もあった。八歳上の兄は、よき理解者であり競争相手だった。医者にしたいという両親の願いをふりきったのは、法律を学ぶ兄への競争意識と、桃園にはもうすでに女医がいるので自分は桃園で初めての女裁判官になるという野心だった。ところが兄と一語なら心配はないと両親が認めると、外交官、政

治家へと次々と夢はふくらんでいった。アメリカへの留学は、法律しか知らない女学生に、修士の学位以外に法律とは全く別の新しい世界へと目を開かせるチャンスを与えた。むさぼるように本を読み、旅行をした。そんな過程のどこかで、当時世界中にまき起こっていたウーマンリブの運動に出会った。彼女が抱きつづけてきた素朴な疑問。「どうして女が女であってはいけないのか、なぜ女であるということと差別されるのか」という疑問が、全世界の女性に共通する認識であることを知り、それを

理論化し、運動する必要性を感じた。七一年に帰国すると、政府の役人として働くかたわら「新女性主義」という言葉をつくりだし、これに関する文章を発表したり、講演すること、たった一人で始めた。台北の喫茶店の二階に「拓荒者（開拓者）の家」を置き、時代女性協会を作ろうとしたが、党の反対で果せなかった。

「新女性主義」のバイオニアとして

呂秀蓮は七五年一月から九月まで、アメリカ、韓国、日本などを訪れ、

わたしの遺書

抄訳——陳菊

監獄は人類の恥辱であり、政治監獄は更に残酷です。しかし、恥ずべきは囚われている人びとではありません。自分の権利を勝ち取り、そしてそれを守り抜くよう人民を激励するのは、人類の良心に基づく行為であって、絶対に暴力ではないことを、わたしは死に至るまで確信しています。

すよう、お願い致します。皆さん、どうか故郷の人びとの苦しみの叫びを常に聞き取ってください。

わたしは死に至るまで確信しています。最後に、わたしは両親と兄弟にお詫び申し上げます。進よ、雄よ、強くおなりなさい。わたしが獄中で死んだら、郷里三星の山上に埋葬してください。

わたしは知っています。最後に、わたしは両親と兄弟にお詫び申し上げます。進よ、雄よ、強くおなりなさい。わたしが獄中で死んだら、郷里三星の山上に埋葬してください。

陳菊 獄中にて親筆
80・4・26 風雨の夜

した事も、政府を刺激した。

民族主義への目ざめ

疲れきった呂秀蓮は、三たび台湾を離れ、米国のハーバード大学に留学した。ここで中絶の合法化と夫婦の財産共有化に関する二つの論文を書きあげ、同時に国際政治、台湾の歴史の書物を図書館にこもって読んだ。また在米台湾人の生き方への批判から、祖国愛に目ざめ、「新女性主義」とともに民族主義を身につけるようになる。外国に財産を移し、歯ブラシだけを持ってすぐ台湾を逃げ出せるようにしている、「歯ブラシ主義者」と呼ばれる二万人の台湾人



1979年12月10日 高雄事件

は、アメリカと台湾を行ったり来たりするなど、台湾で稼いだお金で贅沢に暮らしている。彼らに比べ、台湾から逃げだすこともできない貧しい人たちが、月給二万五千円で働く女子労働者たちこそ本当に祖国に貢献しているのではないかと彼女は考えた。一年間悩んだ末、女性解放のために費した日々を無駄にできない、美しい故郷と祖国の人々を捨てることはできないという強烈なナショナリズムから帰国を決意した。帰国後、七八年十二月の選挙に、国民大会代表候補者として出馬する。

「新女性主義」と新たに身につけたナショナリズムが新しい友人を作った。台湾独立運動の指導者、郭雨新の秘書・陳菊や、政治犯として長く獄中にいた施明德（美麗島雜誌社総経理・高雄事件で無期懲役）の妻、リンダ・アリーゴ。アメリカ人リンダは、文化人類学者で台湾の女子労働者を調査する一方、夫、施明德と共に民主化闘争を戦ったが、高雄事件の後アメリカに追放された。民主化運動を続ける無党派の同志たちとともに、美麗島雜誌社を設立、彼女は副社長となった。

七九年十二月十日、高雄の国際人權デー記念集会で、呂秀蓮は、熱狂的な聴衆に思いのたけをぶつけた。このため高雄事件関係者として三日

女性運動を見てまわった。なかでも、メキシコの国際婦人年世界会議に、台湾の代表として出席した時の衝撃は大きかった。中国の非難で途中で帰らなければならなかったが、それでも世界の女たちの躍動する息吹にふれた。

秋に帰国するとすぐに、女性解放運動にもてる力をすべて注ぎ込むために、政府の職を辞した。台北と高雄に活動の場所を置く。女性解放の思想を広めるために拓荒者出版社を設立し、新刊書十八冊を矢つぎ早く出版した。「男は外、女は内」という役割分担に挑戦するために、男性を対象にして料理コンクールを開いたり、女性には「台所以外の茶話会」と称して座談会を主催した。資料の収集、調査活動にもとび回る。たとえば、女子学生とともに、主婦千人に対し、私たち日本の女が直面しているのと同様の家庭、教育、姑などの問題に関するアンケート調査をし、分析した。次にはこの調査結果にもとづき、「結婚以後」という座談会を開く。総勢二万余の人がこの座談会に参加した。

次第に運動を中下層階級の女たちにも広げなければならぬと痛感するようになった。女性蔑視がまかりとおる台湾では、高度成長に伴うわずみのし寄せは、あらがう手段と

後に逮捕された。呂秀蓮との関係を疑われるため、女性解放を唱えることさえタブーになっているという。

いま台湾には、八千人が政治犯として囚われており、呂秀蓮はその一人に過ぎない。そして民主化闘争を戦っている女性は、呂秀蓮とともに獄中にいる陳菊をはじめ、台湾女性の生活をリアルに描いた郷土文学作家・曾心儀、アメリカで戦っているジャーナリスト陳婉真等、皆三十歳前後の若い女性たちである。このほか省議員の蘇洪月嬌、黃玉嬌、そして十二月の選挙で、獄中の夫に代って立候補しようとしている妻たちなど、政治の世界で活動している女性たちもいる。

私たちは何をすべきか

日本人は中国大陸には関心を持つが、台湾についてはまるで知ろうともしない。台湾で民主化闘争をしている人々の思想は、大陸との統一派や台湾独立派に別れている。しかし私たちが彼らの行動や言葉に接すれば、私益を捨てて祖国を愛する彼らの思いに心動かされ、人間の尊厳を感じざるをえないだろう。

このような民主化闘争の「もつと、もすぐれた、もつとも輝かしい人たち」を理解し、無言の支持をしてい

てない私たちの肩にかかっていた。台湾の工業化を支えているのは、若い女子労働者の低賃金であり、買春観光からはいる外貨は数知れない私たちの肉体によってもたらされたものであることを、呂秀蓮は知っていた。

台北と高雄に「あなたを守る電話」をつくり、医師、弁護士、学者からボランティアをつのり、かけこみ寺のような機関とした。この電話は社会の底辺にいる女性たちの心をとらえた。スラムに住むある女性はこう言った。「私たち、今とても安心してゐるのよ。だって誰かにだまされても、あなたを守る電話が助けてくれるわ。」

当然、旧弊な思想をもつ台湾の男性たちから反撃を受けた。批判のつづては、反体制に属する男性の一部からも飛んできた。講演が中止せられるなどのかずかずの障害にあいはじめる。「新女性主義」に関する本の出版も不許可となる。「何秀子」という売春宿の女主人をとりあげたことで非難される。そして運動が社会の底辺で一番助けを必要としている女性たちに広がりはじめたために、国民党政府からの圧力が強まったのである。「あなたを守る電話」の内容が、台湾社会の暗黒面を浮き彫りに

るのは外国へ逃げだすこともできない一般人々であろう。中壢事件に一人、高雄事件に三万人もの人々が集まったことから、台湾の民衆の中に渦巻く、民主化への願いを知ることができる。だからこそ国民党は、彼らを恐れ、活動的な人々を牢獄へと封じ込めたのだ。

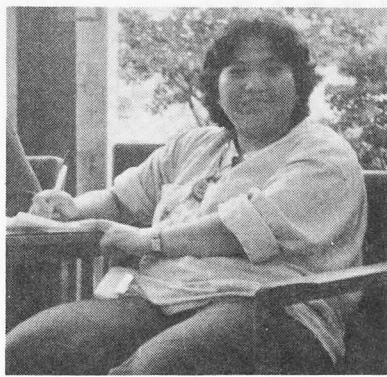
五一年間にわたる日本の植民地統治の機構を、国民党はそのまま引きついだ。このことを象徴するかのようには、植民地時代の地図と現在の地図を見比べれば、日本が建てた公共施設が国民党政府によりそっくりそのまま使われていることに気づく。

この歴史的事実を無視するわけにはいかない。今は、日本の台湾への投資累計件数八五九件、累計額二億八四〇四万ドル（七八年度末）からもわかるように、経済という手段により台湾を別の形で侵略し、若い女性の労働者を搾取したり、公害を輸出したり、日本製品を台湾中にあふれるほど売りつけたりしている。

最後に女性解放にたづさわる日本の女として、呂秀蓮のバイタリテイにあふれた運動の方法や成果に勇気づけられる。そして呂秀蓮や彼女と同じ精神で民主化闘争を続けている女たちに思いをはせると胸が痛む。彼女が一日も早く釈放されて、戦いの場にもどれるように、と願う。

観光客目あての宝石店や時計店が並ぶ九龍の中心街に、C I C（香港キリスト教工業委員会）がはいっているビルがある。ウエンディ（ウエイ・リング・ブーン）は事務所にいた。彼女は私を瞬時凝視して、女子労働者のことを調査してきた私の訪問の目的を尋ねた。最初、ぶっきらぼうな態度に困惑したが、私のためにスケジュールをたててくれた抜群の事務能力に舌をまき、すぐに飾らない言葉の内側にひそむ暖かさを感じた。

縫製基地として世界に名高い香港で、女子労働者のはたす役割は大きい。八〇万の工場労働者のうち四五万は女性。女子労働者の半数以上は、繊維関係の仕事に従事し香港経済の基幹部分をささえている。今年になって、地価の高騰とインフレーションにより、香港の縫製工場は次々に



ウエンディさん、京都で

閉鎖し中国大陸や外国に逃げ出し、深刻な社会問題となっている。この晩、私は縫製工場で働く四人の女性たちに会った。C I C、とくにウエンディが彼女たちを助け、閉鎖した工場から退職金を獲得する闘争をし、お金が出たので、プレゼントをもってお礼にきたのだった。私たちは仕事のこと、結婚観、自分自身のことなどを大いに語り合った。この話し合いでウエンディは、彼女たちと私の唯一の共通語、普通話で喋るよう

私は労働者であることを誇りに思う

—香港で出会った女たち— 遠野はるひ

に何回も聞いた。カタコトの中国語より英語を使ってしまう私に、ウエンディは言った。「中国語ノ直接話すことが大事でしょ」彼女の言葉は胸にいたくこたえた。

労働者が自分たちで発言し、書き、調査し、行動することが一番重要だと彼女はつけたした。これは草の根レベルで運動をしているC I Cの理念でもある。労働者のなかからリーダーを育て、彼らの住む地域で拠点をつくり労働法の勉強会をひらく

など諸活動を通じて、仲間の労働者としての権利意識を高めてゆくシステムをとっている。

例えば、思想の違いをのりこえ女性労働者という立場で一致団結し、香港の女性が最近かちとった出産休暇期間の給料支給も、C I Cの女子労働者たちがリーダーシップをとって、調査をし、戦略をたて、他の女性グループによびかけて獲得した。

C I Cの理念が現実となっているのを私自身が直接体験したのは、地

域のリーダーとして働く黄さんと馮

さんに話を聞いた時だった。女性差別が共通の話題。香港では女の子が家の犠牲になっていて、家計の重荷をせおっているという。「C I Cの活動に参加すると忙しくてボーイフレンドをつくる暇がないから、結婚できないのよ。」笑いながら、ふと真顔になって話をつづけた。「でもC I Cの活動をするうちに、シャワーを浴びたようなフレッシュな気持ちになったわ。以前は仕事から帰るとテレ

スラムの子どもたちと共に

—タイのプラティープ・ウンソントムさん—

プラティープ・ウンソントム、小柄な体で忙しそうに動き回っている彼女に会ったのは一九七九年夏であった。子ども達の歌声、黒板を食い入るように見ている眼、笑い声、そんな教室の一室だった。

バンコクの人口五百万、その約二五パーセントは五百近くのスラムに住んでいるといわれる。タイのバンコク中心街から約五キロ離れた所に彼女の住んでいるバンコク最大のスラム「クロントイ」はある。スラムの人々はほとんど農村から来た。農村の崩壊、農業で食べていけない農民達が都会に流入してくる。そして、低賃金で働かされている。行商・肉体労働・売春・空カンやビニールを集めるなどである。スラムは多くの問題を抱えているが子ども達はそこに生きている。私の短い滞在期間中、子ども達がよく働くことに驚いた。バンコク市街の喧噪の中、スピードを出して行き交う車の洪水でも信号で車が止まればさっと寄って来て車のガラスをふいて賃金をもらう。新聞を売る。車のお守りの花を売る。プラティープさんは働きつつ夜間の学校に通い教員の資格をとるとす



タイのスラムの子どもたち

ぐ、自分の生まれたスラムの子ども達を集めて教育を始めた。そして、今の「パッタナ共同体小学校」をつくりあげてきた。わずか数人の子どもたちで始めた学校は、現在生徒数九百人、教員数三七名、うち女子教員は約六割。さらに、長年の闘いで一九七六年国から認可され公立となった。

彼女が闘いにたちあがったのは一九七二年、スラムの立ち退き命令がでたときからだ。港湾の拡大計画によりクロントイ・スラムの撤去、住民追放命令がでた。「スラムを離れては生きていけない。なぜ自分達の家があるここに住んではいけないのか」そう訴える人々の声を無視して港湾警察が介入してきた。スラムには反対同盟委員会ができ、彼女はそ

の委員に選ばれた。彼女はその委員会を通していろいろなことを学んだという。代替地もないまま追い出そうとする非人間的なやり方、また毎日学校にきている子ども達の事などである。あの子ども達は、もしスラムから出ていけば今より費用のかかる学校しかなくなる。それではとても学校に通えない。ここに学校があるから子ども達は教育を受けられる。撤去問題が大々的にマスコミに取り上げられるにつれ、支援が増えてきた。それと同時に彼女の学校も注目されてきた。ポランティアもたくさんくるようになった。教育はすべての子に与えられるべきであり、それは国の責任でもあると彼女が主張したため彼女の学校は共産系だと思われて、長い間政府の認可がおりなかった。しかし、このスラム徹去反対闘争により世論が注目したため、やっとプラティープさんの学校を政府は認可せざるを得なくなった。

プラティープさんは、今スラムの子ども達すべてが教育を受けられるような運動をしている。教育を受ける受けたいはスラムの子どもの責任ではなく、国の責任である。バンコクにあるスラムすべてにパッタナ共同体小学校のような学校を作るのは予算の関係で無理である。だからスラムの子ども達も一般の小学校に登

校できるよう要求し続けている。今まで社会における教育という点が無視されすぎていたよだという彼女の考えに基づいた運動でもある。

スラムにいる子ども達は皆明るくて純真であり、その子ども達こそプラティープさんの人生であろう。教室を見学させてもらった。ちよつとれながら、それでも歌を唄ったり、踊りをしたりしてくれた子ども達。イスの上に乗って生き生きと動いている子ども達。プラティープさんの黒い大きな瞳の輝きにも通じるものの子ども達のもの。子ども達も明るい姿から垣間見えた気がする。

一九七八年八月、プラティープさんはワイリピン故マクサイサイ大統領を記念したマクサイサイ賞公共部門賞を受賞した。

第三世界においては人々の置かれている状況は厳しく、階層がはっきり分かれ、教育が一部階級のものになっている。しかし、教育を個人のものとすることなく社会における教育を一つの哲学とし、それを次の世代に引き継いでいかなければならない。プラティープさんの教育——一人の女としての生き方——に一つの教育の方向を見、同じ教育者として、私自身現場の中で子ども達と向かい合っているかねばと思う。

（手塚洋子）

インドの女たちはなぜ 強姦反対闘争に立ち上がったか

少女マツラの事件から

インドのボンベイに近い農村に住んでいた十五歳の少女マツラは、幼いとき、両親を失い、兄と暮らしていた。働いていた家の親類の青年と知り合い、結婚することにした。ところが、この結婚に反対だった兄は、未成年の妹が婚約者とその一族に誘いかいされた警察に訴えた。このため、マツラは、兄と婚約者側の人々と共に警察に呼ばれた。夜九時ごろだった。マツラと青年の陳述書をとったあと、立ち合った三人の警官の一人は帰宅した。十時半ごろ、マツラがほかの人々と警察の玄関を出ようとする、残っていた警官の一人に腕をとられ、ついてくるようにいわれた。ほかの人たちは帰るように命じられた。

このあとマツラは警察署の裏のトイレに連れて行かれていた。マツラは裏庭に引きずり出されて強姦された。横たわったままのマツラのところに、もう一人の警官が来て、暴行しようとしたが、酔っていたため、未遂に終わった。

外で待っていた兄たちは不審に思っ

てマツラを呼んだが、何の応答もなかった。そこへ酔った警官が出てきたので聞くと「マツラはもう帰った」といった。しかし、まもなく、マツラがやつのことではい出してきて、強姦されたことを告げた。すぐ医者のところへ行って、事のすべてを話すと、警察に報告するようにいわれた。事件を知った近所の人々が警察に集まってきて、暴行警官をなぐるぞ、警察を焼き打ちするぞ、という騒ぎになった。

一九七二年三月に起ったこの強姦事件について、地裁は「マツラはウソつきだ」とし、警官とマツラの間で性行為があったことは認めたものの、マツラがすでに婚約者と性体験があったことを持ち出し、彼女の体に傷もなかったことをあげて、強制でなく同意のもとでの行為で、強姦とはいえないと警官を無罪にした。

しかし、高裁は、「同意」と「受動的な屈服」とは区別すべきだとし、状況から見ても、強制された性行為であると判断、強姦警官に禁錮五年、未遂警官に同一年の刑を宣告した。ところが、最高裁が、昨年九月の判

決で「死または重大な傷害となる恐怖を伴わなければ強姦とはいえず、マツラに抵抗したという証拠はなく、性行為は平和的に行なわれた」として、高裁の有罪判決をくつがえし、二人の警官を無罪だと釈放した。

この最高裁判決は、インドの女性たちの憤激をまき起こし、裁判のやり直しを要求して、全国で怒りの抗議デモが行なわれた。四人の法律学教授も連名で、最高裁あてに次のような公開質問状をつきつけた。

これは法と憲法で定められた女性の基本的人権を踏みにじる異常な判決だ。マツラが陳述も終ったあと警察に留まるように求められ、友人と親せきは帰るようにいわれたのはなぜか。強姦警官から彼女を救い出すためにもう一人の警官はなぜ手をこまねいていたのか。電灯が消され、ドアも閉められていたのはなぜか。

十四・十六歳の少女が、警察署内で二人の警官のワナにかかったとき、救いを求めることができたなどと最高裁は思ふのか。労働者である少女が、体格のよい警官に対して、体に

傷を負うほど強い抵抗ができると思ふのか。

マツラが、婚約者に貞節を示すために、強姦されたと作り話をしたという地裁の判断を信じるのか。

マツラを警察に呼び出して拘留するという重大な違法行為に対して、判決は何の非難もせず、警察を強姦や性行為への屈服の場に利用することも何ら非難していない。

最高裁は、マツラの社会経済的地位、法的権利についての無知、犠牲者の年齢、貧しくしいたげられた者が警察で感じる恐怖感などに何の考慮も払っていない。最高裁判事たちよ、どうか、デリーの近くの村の警察を、貧しい身なりに変装して、おしるびで訪ねてみて頂きたい。

このケースを大法廷で再審するよう訴えたい。これは、異例でナイーブな提案と思われるかもしれないが、人権擁護と憲法が危機に傾いているのだ。この国の何百万人のマツラの窮状は、大法廷にかかっている財産権の制限問題と同じように重大なのである。

まさに、インドでは何百万人のマツラが苦しんでいる。彼女と同じように警察で警官に暴行されるケースがいかに多いか、女性たちの調査で明るみに出たが、軍隊が村に入ってきて、村の女性たちを手当たり次第に

犯すという事件も珍しくないという。強姦はまさに、インド社会ではあまりにも日常茶飯事のように起こっており、欧米諸国のレイプとは違って、カースト制度という階級差別と結びついた陰惨な形をとっている。低いカーストの女性たちが、性的陵辱の犠牲になるからである。

加害者の男性は一般に、マツラ事件と同じように罰せられもせず、被害者の女性の方は故郷にいらなくなり、絶望のあまり自殺する悲惨なケースも少なくないのである。たとえ裁判に訴えても、女性は(身持ちの)いい女と悪い女に分けられて、被害女性はちやうどマツラのように不道

徳な悪い女だから、「同意」の上のことと見なされ、強姦犯人を無罪にするような立証にばかり力が注がれるのである。

こうした階級差別、性差別という二重の抑圧に対して、インドの女性は闘争を続けてきたが、マツラ事件の最高裁判決に対しては、今年三月の国際婦人デーで、強姦反対デモを展開したり、ねばり強い抗議行動を進めてきた。レイプ・フォーラムという強姦問題に取り組むグループもできている。

こうした動きを背景にインド内務省は三月、警官による強姦を規制する指示を出した。①夜間は必要やむを得ない場合以外女性を逮捕してはならない。②逮捕のさい、女性被疑者の体にはふれてはならない。③警察に連行するさい、親類の男性のつき添いを認める。④警察署内でつき添いの男性が留まって、暴行を受けないうように監視してよい。⑤女性被疑者を長く留置場にどめず、なるべく早く保釈する、などだ。

この九月、京都で開かれたアシスカ(アジアに社会的関心を持つキリスト教施設協会)の婦人会議で、インド代表アルナ・グナナダソンさんは「女性のセルフ・イメージを変えよう」という問題提起の中で、インドの女性がいかに性的な暴力の犠牲になっているかの例をあげたのち、次のように述べている。

を得ない場合以外女性を逮捕してはならない。②逮捕のさい、女性被疑者の体にはふれてはならない。③警察に連行するさい、親類の男性のつき添いを認める。④警察署内でつき添いの男性が留まって、暴行を受けないうように監視してよい。⑤女性被疑者を長く留置場にどめず、なるべく早く保釈する、などだ。

この指示に対して、女性たちは、女性被疑者の夜間留置禁止、強姦事件の民間婦人団体による調査権、加害者の男性の立証義務などをさらに要求している。

一方、議会では、近く強姦法の改正を行うことになり、改正案によるうになった。当時のヒンズーのマヌ法典が女性の地位を引き下げる中心的役割を果たした。女は子供の時は父に、成長してからは夫に、夫を失ったあとは息子に従え、決して自立してはならない」と書かれている。

文学や芸術は、男たちの犠牲になり、貞節、従順な女を理想として描き、インドの少女たちは、このような手本を見習うことができないと恐しい運命に出会うと脅かされる。絵画彫刻は女性を女神か母、または娼婦に分類する。母親として見られる一般女性について性関係は母親としてのアイデンティティ確立の手段としてのみとらえられる一方で、娼婦

と、強姦に対する最低刑が現在では決められていないのを、最低七年とし、さらに輪姦や警官、公務員などの強姦は最低十年としている。また、警官、公務員などの場合、原告女性が立証しなければならぬことになっているのを、被告に立証義務を負わせている。また、被害女性のプライバシーを守るために、写真裁判を提案している。この強姦法改正案にはさまざまな議論があるが、少くともマツラ事件がきっかけで、法的規制の動きにまでなったのは、インドの女性たちが女性の人権を守るために闘ってきたからである。

(松井 により)

のエロチックな要素が重視されるのである。男児の出産は大歓迎され祝われるが、女児の誕生は憂うつなことを意味し、「葬式のようなだった」と述懐する老婦人もいる。下水溝や寺院の外に女児を捨てたり、産院で授乳を拒否したり、殺してしまう話も時折り聞かれる。

ヒンズーの歴史の多くの時代と場所、女は男の財産として、意のままに処理されてきた。強姦はたんに性的快楽のためだけでなく、男の財産を破壊する機能も持つ。地主は反抗的な小作人に対して、男たちを雇ってその家を放火させ、その女性たちを強姦させるのである。村を焼い

女性の問題とは ただもう生き延びること

インドのアルナさん
京都アシスカ会議での発言から

たり、女性を強姦したりという低いカーストに対する残虐行為はますますあたりまえのことになってきている。こういう状態で女性は二重の抑圧を背負っているのである。

女性の解放はそれだけを切り離して達成することはできず、階級、カースト制度の搾取からのあらゆる解放闘争の一部として行なわれなければならない。それは、女性の問題に的を絞る必要性を過少評価しているのではない。この不安定な経済の下で、最もしいたげられているのは女性であり、女性なるがゆえに特有の差別を負わされているからである。農業で、女性は男性より低賃金と

失業に直面し、性的搾取を受けている。工業でも、機械化でまっ先にクビになるのは女性だし、産休や保育所はほとんどの女性には手が届かない。

世界中の女性解放運動は、まだ根をおろしていない。なぜなら、中産階級志向で、教育を受けた余裕のある都会の女性を中心に行なわれているからだ。大多数の女性が暮らしている貧困に打ちひしがれた村やスラムにはその波が浸透していないのである。

インドの多くの女性団体の誤まりは西洋の女性解放運動をそのままインドに持ち込もうとしていることである。

チリの独裁者。ピノチエト訪日を許さない！

アジェンデ政権が倒れた一九七三年のチリにおける軍事クーデター以来、ピノチエト独裁政権によって殺された人間は、人口一千万人の国で実に五万人と云われている。

当時南米で唯一、社会主義政権が生じたチリに、民族解放闘争を闘う第三世界、発展途上国の人民の熱い思いが寄せられていた。女性解放について「女性のみ解放闘争であってはならない。被抑圧者全体の闘争が、女性解放のために努力すべきなのだ。それが闘いを自らに引受ける方法であり、それ故、その闘争は

男女双方によって協力されるものである」と、明快な姿勢を打ち出したアジェンデ政権下において活躍した数多くの女性組織はすべて壊滅した。あらゆる社会運動の担い手が、殺され、逮捕され、拷問され、それは現在もなお続いている。

一九七九年九月十二日の第三四回国連総会に提出された国連経済社会理事会の報告書「チリにおける人権の保護」や、アムネスティ・インターナショナルで告発されている女性政治犯への性的拷問の実情は、言語を絶するほど残虐なものである。

ある。アメリカでの女性の問題は、社会が人格の発展に加える制限、性別役割、選択の自由などに焦点がある。しかし、ほとんどのアジアの国々では、女性問題とはたまたまうき延びることそのことなのである。現行の政治、社会、経済体制の枠内で行動するのは女性の地位も表面的な変化しか獲得できないだろう。今、緊急な課題は、女性を、職場や地域のさまざまな組織に動員して、日々の問題について闘争を組むことである。それは、働く人々のさまざまな部分の民主的な運動の一部として、またそれらと同盟して、進められるべきだ。働く男性が、女性と団

結して闘うときにこそ、男性支配を打ちこす条件ができるのである。と同時に、女性固有の問題に常に注意を向ける運動でなければならない。物価上昇や、警官や地主の働く女性に対する性的暴行などは女性を闘争に立ち上がらせることができるだろう。すでにさまざまな運動が各地で起こっている。女性によいことをもたらすのは国際婦人年やリブではなく、こうした運動に参加することだけが、女性を抑圧と服従の牢獄から解放し、女性のセルフ・イメージの変革へと続いていくのである。(大石まゆみ抄訳)

また年少者の逮捕、尋問、拷問が普通のこととなり中学・高校の女子学生に対する拷問も報告されている。裸にしてなぐる、蹴る。肉体のもつとも敏感な部分、男女の生殖器に電流を通す。肛門に電流の通じた電線を挿入する。水あるいは汚物のなかに沈める。手、足を宙吊りにしてたえまなく殴打する。生殖器、肛門、腕に針をさし、超音波を投射する。裸で何時間も立たせておく。飲料水、食糧を与えない。プラスチックの袋で窒息させる。薬剤の使用、他人の拷問現場に立ちあわせる。性的はず

かしめ、女性に対して調教された犬をけしかける。看守による暴行など肉体的・精神的拷問の実例が数限りなく報告されている。その独裁者ピノチエトが日本を正式訪問するという。私たちはピノチエトの訪日を許してはならないと思う。アジア・アフリカ・ラテン・アメリカで民族解放・女性解放運動を命をかけて闘っている女たちとのさやかな連帯のために！(「プレゼンテ」国連資料より) 五島昌子



光州の無名の女たち

闘いの中からのメッセージ

五月。光州でたちあがった市民の群れの中に、血を流して倒れた者の中にいた女たち。息子、娘、孫たちの柩の上に慟哭する母や祖母たち……そして銃剣の制圧と死の沈黙の支配する町から、それでもなお外部へ真実を伝えようと生命をかけた女たち……。

私たちは、その人々の名も知らず、直接に顔を合わせたこともない。だが、わずかに、テレビのニュースの一場面や外国通信社のもたらした記事を通して知ったこの人々のことは、私たちの胸に焼きつくように残っている。

たとえば、「外国特派員のみなさまへ」と題する英文の手紙の筆者である光州市の若い女性市民。この人は英語を学び、正確な英文を書くことができた。光州で起ったことを外国に知らせるために、彼女はおそく夜を徹して、自分の見聞きしたことを綴り、外国人記者に手渡した。彼女は自宅にタイプを持ってはいなかったのだらう。文字は一字一字ブロックで手書きにされている。

彼女はこう記している。「私はもし

や、外人特派員たちが、私たちの町で起った悲劇の重要な局面を見落しておられるのではないかと心配しています」……そして、戒厳軍司令部によって捕えられ危険を承知で、あえて光州の真相を伝えている。

五月一八、一九、二〇日の空挺部隊の残虐な行為はとも信じられな

いほどの残虐さでありました。私は、幾人かの年離れた人々が、このような残虐な行為は一九五〇年の韓国動乱(朝鮮戦争)のときにもなかったと発言したことが、市民感情を奮起させたと思像しています。

私たちは、吸血鬼集団ともいえる空挺部隊が、殺した数多くの市民の死体を焼いたりかくしたと信じています。

現在の光州が、学生と市民勢力によって占拠されるようになった決定的なできごととは、学生のデモ隊を運んだという理由で四人の同僚を殺された職業運転手の一団の怒りと、彼らの車による抵抗に端を発しています。

私は道庁舎前の広場での市民集会、

示威運動に二三日の午後七時一〇分まで参加しました。私は学生指導者の純粋さにショックを受けました。私は自由と民主主義がこの集会に具現化されていたことを誇りに思います。

抵抗運動の主要勢力はずっと秩序のとれた行動をとっていました。

例えば、市の中央警察署は、すくなくとも三度にわたって戦車が市民を制圧するためにやって来るといふ極度の興奮状況のなかでさえ攻撃されませんでした。MBC放送(文化放送)局が、原因不明の火事に襲われた時に、学生たちは消火に努めていたことを、私の妹が目撃していました。

今、私たち光州市民は誇りに思っています。しかし同時に私たちは恐

しい孤立感を味わっています。正義の学生たちは、夜がしのび寄ると寂しさを隠すことができないでいます。これは、主にマスコミの海外報道が、私たちの期待以上に弱く、皮相的なものでしかないからです。ソウルから

の放送は虚偽と不誠実に満ちているので私たちを驚愕させました。

彼(全斗煥)は吸血鬼かさもなく、少なくとも異常な性格の持ち主だとは思えません。私たちは全斗煥のこの先の生きる道は、海外逃亡か、さもなければ弾圧政策を強化して、光州市一帯の市民の大虐殺を行う他はないであろうということを知っています。

私たちは、私たちの自由が私たちの自身の手によって勝ちとらなければならないことを知っています。しかし、私たちは、SOSを私たちの若き闘士たちのために千度でも訴え、祈らなければなりません。

伝えられるところによりますと、ソウルおよび他の地域から多くの学生たちが、光州地域を包囲している軍隊の戦線を幾度も継続して突破しようとして撃ち殺されたということです。

私たちはまた、死亡した兵士も私たちの同胞(はらから)であること

を忘れてはいません。少数の反逆者によって、なんと大きな悲劇がもたらされてしまったのでしょうか。このことを報道してくれる人に感謝をささげると同時に、幸運をお祈り致します。

一九八〇年五月二三日午後一時

南ア連邦の 人種差別の中で

「ふうん、お宅はあなたが日本国籍で、おつれあい南アで、坊やはカナダ人。随分国際的ですね。」

我が家の家族構成を聞くと皆感心したように言うが、子供がカナダ国籍なのは別に奇をてらったからではない。出来れば日本国籍を与えたかったのだが、女親だけが日本人だと、子供は日本国籍を取れないので、仕方なくカナダで子供を生んだにすぎない。夫の国籍にしかつたのは、南アでは日本人の血の混った子は二流の国民としてしか扱われない為であった。

夫の祖国南アフリカ共和国は人種差別政策を行っていたわけだが、南アを訪れる日本人は藤原弘達のように、白人達にチャホヤされたり、白人専用のホテルや便所を共用出来たりするとすっかり感激してしまい、自分達が「名誉白人」と呼ばれる事に含まれる人種差別を見落しがちである。南ア政府が日本人を「白人並み」にしたのは、白人専用の場に日本人が入れなければ商売が出来ない為であつて、日本人を対等と認めたからではない。その証拠に、南ア政

府は白人の夫と私の結婚を長い間合法とは認めなかった。

南アでは白人とその他の人種との結婚は法律で禁じられている。そのような結婚は白人優位の人種差別政策を根底から崩してしまうからだ。国民は白人、白黒混血、黒人、とに峻別されており、アジア人は又別に一グループをなし、ほぼ白黒混血と同じ社会的地位にある。白黒混血は一見白人と見分けがつかない場合もあるが、白人か混血かは厳しくふるいわけられる。白人と誤認されて来た人間が混血と判別されると、白人居住区域から追放され、職も失うし、白人と結婚も出来なくなる。白人と白黒混血の結婚も違法である。(しかし現実には白人の子を生む黒人や混血の女性が多い。)

不道徳行為という条例は結婚だけでなく、白人とその他の人種が恋愛関係を持っただけで逮捕処罰するものが出来る非人間的なものである。又、南ア国籍の白人が国外で他人種と結婚した場合でも帰国して配偶者と同居する事を禁じている。私は結婚後南アへ渡航申請を行ったが却下



われらの旗 回帰する渦

縄文土器、あるいはアイヌやスキタイ、ケルトなどの彫刻に見られる古代の縄文は何を意味するのでしょうか。宇宙と語るダイナミックな渦——エネルギーをシンボライズする原始の渦。この時代、女も生命感にあふれ、潑刺と光り輝いていたでしょう。そんな女への回帰をめざして、縄文を女の旗としてデザインしました。旗を染めるのは京都の染色家で、京都アムネスティの会員でもある矢島美佐子さんと南玲子さん。どうぞご期待ください。女の旗を高くかかげる日を！
(富山 妙子)

■KCIAに拉致されたジャーナリストのレポート

戒厳令の国/韓国

石井清司 著

学陽書房

定価 1,400 円

東京都千代田区富士見1-7-5 電話・東京03(261)1111

アメリカの中の第三世界



——ルーシー・クボタ(久保田)さんの戦い——

ルーシー・クボタ(久保田)さんは、ロスアンゼルスに住む日系三世アメリカ人の活動家である。

ロスアンゼルスのリトル・トウキョー再開発に反対する住民運動にかわり、昨年末、彼女自身ウエイトレスとして働いていた日本料理店ほり川での組合結成の先頭にたつて来た。今年(八〇年)五月から六月にかけて、ほり川の闘争の仲間たちの招きで来日した。

ロスアンゼルスのリトル・トウキョーは、アメリカの中のアジアであり、第三世界である。そこは戦前はほとんど日本人の町であった。今も日系人、他のアジア系の人々、メキシコ系の人々の住むところであり、いわば、移民として、皮膚の色を異にする者として差別されて来た人々

の歴史のしみついた町であった。

この町に一九七〇年代になると、日本の大資本の進出による再開発計画がすすめられ、従来の地域住民たちの経営する小資本の商店や住宅が追いつてられるようになった。七七年にニュー・オータニ・ホテルが開業、七八年にはジャパニーズ・ビレッジ・プラザが開業して日本からの観光客を集めている——日本からの観光客は日本資本のホテルに泊り日本資本の店で買物するので、利潤はすべて日本に還元され、地元の人々の手もとには残らない。これは日本の観光資本のアジアへの進出と全く同じ構造である。

そして労働者は? そこでも、アジアの国々と同じことが起っている。再開発第一号として建てられた鹿

島ビルの地下一階にあるほり川レストランは、鉄板焼を売りものに二百席をこえる客席をもつ、ロスアンゼルスでも有数の日本料理店である。従業員数はパートを含めて約五〇名いるが、その大部分は、永住権や市民権をもたぬ弱い立場の移民である。スペイン語しか話せぬメキシコからの移民、離婚した日本人妻、観光や留学生ビザで入国したまま滞在している若い人々など、しかもその人々がウエイトレス、ウエイター、皿洗いと職種のちがひによって分断されているために、劣悪な労働条件についても経営者に文句をいえないでいた。一番下の人のいやがる仕事をやるメキシコ人労働者、その彼らをさげすむ日系人従業員。だが、その日本人もまた低賃金と不安定な雇用条件にしばられていた。

ルーシーさんは、ここでウエイトレスとして働く間に、自分自身も一方的な労働時間の削減による減収を経験し、仲間たちに職場の問題について考えようと呼びかけ、組合結成にむけて動き始める。一九七九年の春のことである。

当然、会社側は組合つぶしに狂奔し、労働者たちの切り崩しにかかる。ルーシーさんたちは、ねばり強く、個人的に労働者たちと接触し、組合の必要性を説いた。英語で書かれた

労働契約を、何か国語にも訳してみんなに示した。こうして七九年七月、労働組合を認めるか否かの職場選挙が地区労働委員会の管理の下に行なわれたが、経営者側の妨害、ことに正規のビザをもたぬ労働者を入国管理局に密告するという脅迫によって十七対二十二で、労働者側は敗れた。労働者側はこの選挙をめぐる不当労働行為を労働委員会に告発し、八〇年二月には会社側四人、労働者側八人の証人による公聴会が開かれた。その間、入管に逮捕された労働者の支援活動を理由にルーシーさんは解雇され、専従のオルグとして働くようになった。——食事に来るお客へのピケと説得、公聴会などで、ほり川の闘争はロスアンゼルスにひろく知られるようになったが、さらに、ほり川の本社のある日本の労働者との接触を求めて、ルーシーさんが来日することになったのである。

六月のある夕方、アジアの女たちの会でもルーシーさんを囲む集りをもった。小さな集りだったが、アメリカに帰ったルーシーさんは報告の中で、「アジアの女たちの会」を通して日本とアジアの女たちの戦いについて知ることができたと、高く評価している。
(山口明子)

自ら、抑圧をはねのけることから

高木 澄子

「差別撤廃条約」政府を つき上げ署名に！

「婦人に対するあらゆる形態の差別の撤廃に関する条約」に、コペンハーゲンの国連婦人の10年中間会議で日本政府は署名した。当初それをしなかった。日本の現状は、条約に抵触する分野があまりにも多いからである。

◎教育面は家庭科を女子のみ必修としているので、男女同一カリキュラムになっていない。◎労働の分野は賃金の男女差別禁止の規定があるだけで採用、昇進、定年などの差別禁止がない。◎国籍法が父親の国籍しかとれない父系血統主義で、子の国籍について男女同権になっていない、などである。

これらの差別を法改正して批准にもっていく見通しが立たない、というのだ。女たちは怒り、政府をつき上げた。批准出来るようにこのような差別を撤廃する努力をする、それが政府の役目だ。と。「アジアの女たちの会」をはじめ、女の解放のためあらゆる面から取り組んでいる多

くの女たちが共に、コペンハーゲン会議をはさみ2回の「80年、女の集会」を開いた。

第一回は条約署名の要求がテーマであり、署名後の2回目では早期かつ完全批准がメインテーマとなった。体裁をととのえ、都合のよいどんな法解釈も展開するのが巧みな政府である。差別のある実態は変わらず、充分な法改正もされないままに批准だけはする、ということに絶対には許してはならないからである。

反動化の中の「婦人政策」

署名にはこぎつかせたものの、私たちをめぐる右傾化の状況はきびしい。有事立法策動以来とみに軍拡を重ねる軍備は、かつての専守防衛から海外派兵が論じられるまでに攻撃的になった。そして、日本の独占資本の海外侵略の地を守るため、いつ自衛隊が来るかわからない、とアジアの人々を恐れさせている。その海外派兵を裏づけるべく、自衛隊法さらには憲法「改正」論議はさかんだ。

さらに、それらの作業を我々の知

る権利の届かないところで進めるための機密保護法。信教の自由を犯し一つの宗教の下に国民の精神を統合しようとする靖国神社法制定策動など、今まさに反動化政策ラッシュだ。

このような流れの中に、女をがっかりと組み込もうとするのが「労働基準法改正に関する研究会報告」「家庭基盤の充実に対する対策」「乳幼児の保育基本法」である。

男権尊重的侵略主義で日々仕事にばげむ男たちには、主人として君臨できるひな形小国家を与える。子育て、老人あるいは病人の介護は女の特質を生かしたものととして小国家家庭の守り手である女がするのが当然。どうしても「外で」働きたい場合、若い時はあくまで補助労働。子育て後は「家庭」を守りつつやれ、いつでも首を切れる低賃金パートこそ望ましい。それでも声をあげ続ける女たちには労基研答申を投げ与える。平等が欲しけりや母性保護などかなぐり捨てて男並みに働け、という訳である。

私たちが目指すのは…

て、労働の質を変えたいのだ。生産性に反すると、母性を持つ女を切り捨ててきた資本の論理を変えていきたいのだ。

平等な参加の必要

男は仕事、女は家庭という性別役割分業。男が中心となっており広げてきた経済戦争・経済侵略。その戦線へ男を日々送り出し家庭を守る女。家を守るのが前提とされた上で、結婚前の補助労働、子育て後のパートと、使い捨て自由の低賃金労働者としても利用される。日本の経済発展、海外侵略はその底辺を支えた女の犠牲の上に成り立ったはずだ。

と、同時に、生産の場に主体的に係わることなく、家庭を守られることに必死で、その生活が他の国の人々の犠牲の上に成り立つことに気が付かない。そして女もまた経済侵略に荷担した、といえるだろう。

この傾向をさらに強化するのが労基法研のねらいだ。経済の鈍後を支える多くの女たち。その中で母性を放棄し男なみにやれる女だけは経済戦争の先兵にする。女を分断し、それによってさらに資本にからめとろうとする政策だ。

「家庭こそは社会繁栄の柱」「母と子の心ふれあう育児」と一見ソフ

ト(?)なキャッチフレーズで、ゾッと

する程露骨に性別役割分業を押しつけてくる家庭基盤充実政策。仕事人間の男は自分の身の回りのことが出来る、女は自らの糧を得られない。自立出来ない者同志がつくる、理想的な家。主体性の共同体となり難い家は、それを媒介にまた簡単に国家に統合されていく。



’80年女の集会のデモ

こんな政策のもくろみを拒否する。こういう流れにストップをかけるため、今あらゆる場に女が主体的に参加する必要があるのだ。そのため不可決な条件として平等が絶対必要だ。教育、労働、政治等の場で。

性差別を

輸出させないために

台湾の輸出加工区の日企業でみた光景である。電気工業の工場、10代の半ばと見える、6、7名の女子工員が懸命に部品の一部にハンダづ

けをしている。その作業の速度を20

才位の若者がストップウォッチで計っているのだ。女は単純反復作業、男はその作業能率をさらに上げさせるため監視、管理の仕事。性により仕事を振り分け、それによって現場の効率をよくし、より生産性を上げるという仕組み。日本の労働の場の性差別をそのまま輸出しているのだ。

性差別を輸出して利用し、現地の労働力を安く買いたたくと同時に、それらの労働者を市場として経済的に収奪していく。その地へさらに性を目あてに群れをなしておしかけ続ける日本の男たちの買春状況。

これらはそのまま日本の女、私たちの問題に重なる。今、国内のあらゆる場で女が差別的状態におかれ抑圧されていることが、そのま、アジアの女たちを抑圧する構造につながっている。「国内でわが手に受ける抑圧をはねのけ、アジアへの侵略を押しとどめる二つの闘いは一つ」である。

すべての場に平等に主体的に参加する運動をさらに展開しなければならぬ。その場で始めて、侵略に荷担しない運動も真に進めていける。性差別の輸出に己の立場で「ノー」と言っていける。自ら、抑圧をはねのけることから、アジアの女たちと連帯して行きたい。

このような抑圧をはねのけ、真の解放を得るための女の運動の方向、あり方が今まさに問われる。女の権利要求が経済侵略に、軍事化に荷担しないために。役割分業を一段と強化させ、国家主義を遂行する「家制度」にのせられないために。

最近、こんな問いがあった。「平等を要求する女は、持てる技術力が生かされるためには、自衛隊やトヨタにも喜んで入るの?」問いは二つだ。「自衛隊に入るの?」「悪いことやっている企業に入るの?」

前者に対しては「ノー」である。自衛隊、その国家の軍隊としての性格は、外に向けては日本独占資本の海外侵略を守る武器になっていくし、内に向けては、民衆の民主的勢力への弾圧の道具になっていくことは明白である。そんな軍隊は解体以外にあり得ない。存在すべきでない組織へ向かつての平等要求など決してない。

「トヨタには?」「イエス」である。人として自立して生きていくためには自らの糧を自らの手で得られること、即ち、働く権利が確立していなければならない。資本主義の日本社会で生き、糧を得ることは、必ずや資本の一端を担うことにはなる。

しかし、労働の場合平等に、当り前に女が半分は入っていくことによつ

闘う女たち

今、様々の場で様々に闘っている女たちがいる。軍事費となる税の支払い拒否に取り組む女たち、自衛隊基地の隣りにテントを張りその動きを監視し続けているグループ。入会権を主張し、演習場の自衛隊訓練をゲリラ活動でかき乱している女たち。かつて銃後を支えたことにこたわり、女たちの現在を問い続けているグループ。経済侵略の構造にメスを入れる女たち。買春観光に反対している女たち。家制度を支える婚姻入籍の拒否運動をしている女たち。国籍法の父権主義・女性差別を改正させようとしている女たち。家庭科の男女共修を推し進めようとしている女たち。男女雇用平等法を実現させようとしている女たち。等々。各運動体はそれぞれのテーマを今後一層深めて行くだろう。

また、このところ矢継ぎ早に女の大きな集会がある。「買春観光に反対する!」「戦争への道を許さない!」と。「現在の侵略」と「将来、再び繰り返してはならない侵略」をテーマにして。過去、現在のその構造を明らかにし、侵略に荷担していないために。女たちはさらに連帯し、闘っていく。

コペンハーゲン女性会議に参加して

——私たちの運動にとってなんだったのか——

座談会

出席者

坂元 良江

船橋 邦子

奥田 幸

大石 まゆみ

五島 昌子

松井 やより

司会

草野 いづみ

内海 愛子

——まず、どういう形で参加したかということ、全体を通しての印象を。

坂元 私はテレビの番組の取材を中心に、約一カ月間、国連の会議とNGO(非政府機関)のフォーラムとを行ったり来たりしていました。とにかく、第三世界の女の人の生き生きとした、本当に闘っている人たちのエネルギーに圧倒されるという感じでした。先進国の女の人たちは、その人たちについていくだけで精一杯だった。そういう印象があります。

船橋 私はまる四日間、第三世界に関する分科会と世界平和に関する分科会に出た。日本から来ているということで、第三世界の人たちから、もろにつきあげられ、批判されたことが一回ありました。それから、とくにアフリカの女性が非常にアグレッシブというか、攻撃的で魅力を感じた。それに対して、アジアから来ている人たちは、積極的に運動して

いる人たちが来られない、来ていない状況というのがあったようです。

奥田 私は国連の本会議とフォーラムの方に参加。アジアの人とはあまり熱気ある接触ができなかったが、それに比べてアフリカは、いわゆる体制派自体が革命政権であったりするんで、かなり思想的にも急進的だし、民族解放闘争を経て、その闘いの中で自分達も成長している。よく喋るし、フアイト満々という女の人たちがいっぱい。しかも、闘うだけでなく他のことを全部切り捨てたというんじゃないで、例えば四七才で政府代表で「孫が五人もいるのよ」なんていうような人がいたりね。人間としての生活をすべてエンジョイして、子もいるし夫もいるし、それで運動もしてる。すごい迫力。また、すごくセクシーな、迫力の点では完全に一〇倍ぐらい負けちゃうような女の人たちに会って、これはすごいなあ、こんな人たちに会えてよかった

たなあと思って帰ってきたんです。

大石 私は、これをきっかけに何か人生の方向が見えてこないかという個人的動機が強く……。全体としては、女性のダブル・ワークとかダブル・ロール(役割)という言葉の印象が強く残った。女性が職業をもつ、つまり伝統的生活から新しい方向に踏みこんでいる一方で、男が家事育児にたずさわる、非伝統的職域に入るということに対する抵抗がいかに根強く障害になっているか、日本だけでなく、どんなに女性が働くようになって、家に帰れば家事をやっているというのとは世界的なことらしく、それは普遍的な二つの問題だと思った。それともう一つ、男と女の関係を変えるだけじゃなく、もう一步、女と女の関係を変えていくことの大切さを痛感。具体的に言うと、例えば、日本の女子学生の就職の問題にしても、私自身、自分が卒業した学校の後輩の女子学生達と全くコンタクト

がない。だから職業や就職に関する情報すら女同志のタテの情報のやりとりというのがない。これが男だったら、かなりいろんな意味で先輩、後輩と交流があるんじゃないかと思う。そういう面でも、女は分断され、個々バラバラ、孤軍奮闘という感じがする。女にとって男との関係が第一義で、女との関係というのは第二義的に扱われてきた。そこを変えて、女同志の連帯なり友情なり情報交換なり、そういう面も意識的に求めていくのも、フェミニズムの一つの課題だということを感じてきました。

五島 今回は仕事の都合で、着いたのが、会議が始まってから一週間すぎ、全くの途中からで、民間会議には一度も行けず、政府の方の会議を

傍聴するというのか、ウロチョロするということ感じだったんです。いろんな国の女の人たちが一同に会しているというのものはものすごく壮観。

コペンハーゲンで飢えた!

——第三世界の女性たちの印象が強かったということが共通しているようですが、NGOフォーラム参加者は、それぞれの国でどういう活動をしている人たちですか。

坂元 アフリカ諸国はヨーロッパの植民地だったということもあって、政府代表もジャーナリストもみんな運動家なのね。幸か不幸かヨーロッパの言葉もできるし、地理的にも来やすい。だから、アフリカの人には数も多かったけれども、アジアからは非常に少なく、民間レベルで運動をやっている人が、普通に来られたのは日本とインドだけではないか。ラテン・アメリカは運動家もけっこう来ていた。あとは、ヨーロッパに住んでいる第三世界からの亡命者が多い。ちょうど会期中にボリビアのクーデターがあったりして。

——それらの人々が参加できた経済的バックは?

坂元 私がたまたま友達になった人はグループのカンパで飛行機代を出していた。みんなギリギリのお金で参加していたようだ。

奥田 だから、コペンハーゲンでは物価が高いこともあって、本当の意味で飢えの問題が起こっちゃったの。オーブンサンド二つとコーヒーとトマトで一〇ドル、二五〇〇円もするんだから、金のない人はパンと水だけで生きのびていたって。

坂元 会場の入口で、パンをただで配っていた。デンマーク政府もお金を出したり、労働組合も企業もカンパしたりしていた。

船橋 国連の本会議に出ている人たちが、NGOの分科会のチェアパーソンになったりしているケースもあった。この人たちは国連の方から、お金が出ている。私の出た新国際経済秩序、女性のための世界戦略の分科会は、第三世界の男の論理と全く同じで、日本人が聞くと、ものすごく政治的で、女の視点がないようにも思える。しかし、女の闘いが民族解放闘争の中でしかあり得ない現実を考えたら、当然であるとは思いました。こういうチェアパーソンによるアピール形式のスピーチのある分科会では、国連が金を出している人がかなりいたと聞いている。

奥田 インドからの参加者も飛行機代など全額支給された。コミュニケーション・ムーブメントのリーダーとして国際的にも有名な人、最下層の貧民と、スラムの女の人たちを組織し

た人なんです。かなり有名な人で、彼女には国連が全額支給している。

坂元 そのかわり、二人部屋のすごく小さなところに泊っていた。

近代化するほどに貧しくなる

——第三世界のパワーは、日本に比べるとあまり伝わってこないが、会議では第三世界と先進国の関係はどうだったんですか。

坂元 会議が始まる二日前から、「ジャーナリストのためのエンカウンター」というのがあった。それは、会議の「平等と発展と平和」の三つのテーマについて、国連が世界各国のそれぞれの地域で活動している人たちを呼んで、その人たちから、それぞれの国の話を三日間聞いた。第一日目の午前中にコロンビアの田舎の保健婦さんが話をしたんです。彼女は田舎の保健婦さんで、もちろん英語も話せない。通訳をレシーバーで聞いていたんだけど、彼女が、自分の日常活動の中で農村の女の人や子供たちの話をした。具体的にはコロンビアでは、アメリカの経済進出がいかに農村を破壊しているのか、自分たちの土地をとりあげられて、近代化という名の下にアグリビジネス(農業会社)が入ってきて、近代化するほど、ますます貧しくなっている。約六七%の子供が栄養失調、六



民間フォーラム開会式

軒に一軒しか水道がない、といううなことをトットツと話をするの。——近代化するとますます貧しくなるというのは具体的には!?

坂元 地主がいて小作人がいる。地主のところに企業から金が入って、換金作物をつくってくれといってくる。地主はそれをつくるために、農場をつくり、機械化する。これまで働いていた小作人は、土地を取りあげられて農業労働者にならなくていく。小作人のときは夫も妻も二人で一諸

国連婦人の十年世界会議とは

一九八〇年七月、北欧の小都コペンハーゲンでは世界中から集まった女性たちで一杯になった。一九七五年の国際婦人年から五年目、「国連婦人の十年」の中間年にあたって開かれた「一九八〇年世界会議」に出席するために集まった政府代表団、国連の会議と並行して開催された非政府機関（NGO）フォーラムに参加した民間女性たちとジャーナリストたち、総数は一万人を越したと云われている。

テーマ「平等・発展・平和」サブテーマ「雇用・保健・教育」にしたがって世界百四十数ヶ国の代表たちが十八日間の会期中討議を重ねた。会期中「女性に対するあらゆる形態

に働いて、貧しいながらもどうにかやってきた。ところが、男が働きに出て、女房の仕事がなくなり、家に残されるようになる、ますます貧乏になって食えない。仕方なく、仕事がありそうな都会へと出ていくが、都会にもそうそう仕事があるわけではない。仕事の少ない男がスラムにたむろし、女は「女中」になったり、仕方なく売春婦になったりして食いつないでいかざるを得ない。農民が村から追い出され、都市スラムがふ

の差別撤廃条約」の署名式が行われ日本も署名した。この条約を批准にまで持っていくことが出来るかどうかはひとえに日本の女性たちの運動にかかっている。

最終日、今後五年間、女性の地位向上の指針とする「行動計画」を採択した。しかしこの中に、インペリアルイズムなど同列にシオニズムを女性の敵として入れるかどうかで対立があり、アメリカ、イスラエル、オーストラリア、カナダの四ヶ国は「行動計画」全体に反対票を投じた。

一方、国連の会議場から少し離れた大学センターで、十日間にわたって開催されたNGOフォーラムには八千人の女性たちが参加した。毎日

くれあがる。これは現在、第三世界の都市に共通して見られる現象ですが、近代化するとますます貧しくなることの具体的なあらわれだと思ふ。**松井** あなたがコペンハーゲンから下さった手紙で一番印象的だったのは、アメリカの女が、コロンビアの子供が下痢をするのに、私たちに何の責任があるかと発言したとか。**坂元** アメリカの女性が「子供の下痢がアメリカの責任だ」というのか」と言ったら、セネガルのジャーナリ

朝から夕方まで四、五十のワークショップが世界中から集った女性たちの手で行われ、熱っぽい議論が交わされた。テーマはそれこそ女性に関することすべてで、「アジアの女たちの会」も「国籍法」「買春観光」をテーマに計五回のワークショップを主催し、共通の問題を持つ各国の女性たちが参加して活発な討論、情報交換、今後のネットワーク作りなどを行った。

NGOフォーラムは誰れでも参加出来るオープンシステムでかなり自由な空気だったというものの、アメリカ指導型の運営を嫌って、地元デンマークの女性グループは「インタナショナル・ウイメンズ・フェスティバル」を週末の一日市内の公園で開催、ここにも数千の女性たちが参加して集会や歌や踊りを楽しんだ。



力強いアフリカの女性代表

何もしないなら、これからしてくれという形で糾弾と呼びかけを同時にやっており、拒絶してはいない。日本の企業が実際にはどれくらい貿易をされていて、どんなふうに関係をあげているかということをやんと日本で調べて、きちっと反対運動をしてくれ、そっちが出来ることを自分の国でやってくれという呼びかけがものすごくあった。しかし、日本のマスコミは、ほとんど、こうした第三世界の声を報道していない。だから、第三世界の女性たちの訴えについて一般に全然知られていないというのは、書かないマスコミの責任が問われることになる。

現場の実感と日本での一般的認識には、かなりへだたりがあると思うが、それについてはどうですか。

五島 男の社会がもちこまれているとか、女の集会もまた政治の場であったとかいう感じの大きな見出しが出ている記事を帰ってから見たが、会議場では、発言者一〇人のうち八人までは第三世界の人たちで、とうとうと自分たちの国の問題や民族解放の問題を発言していく。「民族解放と女性解放は一つだ。民族が解放されなくて、なぜ女性解放があるのか」という風にすると、いわゆる先進国、とくにアメリカの代表が、ここは女

の家庭責任の問題とか男との分担の

ストがバツと立ちあがって、「じゃあ、子供の下痢がアメリカ帝国主義のせいじゃないとでも、あんたは言うんですか」と即座に切り返した。そこで、アメリカとセネガルのジャーナリストが、コロンビアの人が提起したことをもとにディスカッションした。

——そのアメリカのジャーナリストは、自分たちの国の多国籍企業がコロンビアやセネガルで何をやっているのか、実態をふまえて発言したんですか。

坂元 それはまったく知らないようだった。

松井 そういったやりとりは、日本の女にもあてはまる場合もある。

全体として先進国の側は、ジャーナリストも女も含めて、自分たちが、どういう構造の上ののっかって生きているのかということが、見えてこない。それで、第三世界から問題をつきつけられると逆に居直ってしまう。コペンハーゲンではそれが全面的に出てきたということですか。**船橋** 私は「開発途上国の女性学研究」という分科会にも出たんですけど、そこでも対象になるのが開発途上国の女性の問題。女性の状況を調べたいというので国連のリサーチセンターで、ネットワークを作りたいという呼びかけをした。ところが、

問題とか男女平等の問題とかそういうことを論議する場であるのに、政治課題を持ちこむな、家庭責任の問題に議題を戻せと発言。しかし、この発言自身がちっとも訴える力を持たない。いわゆる先進国といわれる国の人々と第三世界の人々との間の認識のズレがすごく大きい。日本の新聞の見出しというのは全く先進国ベース。自分たちは輝かしい先進国といった発想で書かれている。

坂元 もちろんマスコミの責任もあるけど、全体としてアメリカ人も日本人もそういう問題意識がまったくない。コペンハーゲンまで出かけていくのに、何が問題かわかっていないように思えた。新国際経済秩序など考えてもいなかったらうし、第三世界の側が何を怒っているのか、何を糾弾しているのかとらえられていないように思えた。結果的には、出かけていった日本人の半分以上の、もしかしたらアメリカ人ももっと高いパーセントの女の人たちが、そのことをはっきり認識することもなく帰ってきたのではないかしら。

大石 「女性と組合活動」と「多国籍企業における女性に対する搾取」という二つの分科会に出ただけけれど、日本人が全然いない。だから、ジャーナリストだけでなく、日本の中で組合活動をしている人でも、グ

ナイジェリアの女性たちが「なんでわれわれが研究対象になるんだ、われわれは自分でやる、何もそんなネットワークなんか必要ない」と発言。そのときガーナの女性も二人いて、そのネットワークがなぜ必要なのか、かなり抗議をしました。イギリスなどを中心に、女性学研究をヒューマンライフの一環として、教育運動としてやっていくという視点で、国連は一つのリサーチ・センターとしてがんばっているという気がしました。メキシコのときと違うのは、高度工業国の女性が、意識的に第三世界の人々と何とか連帯しているというところに対して、逆に第三世界の人たちが、簡単に連帯なんて、といって、それにのつてこない。

松井 かつて先進国の方を利用する。

五島 もっと俗な言い方をすれば、

何で私たちが、先進国の研究（博士論文）材料、対象にされるのかというね。

第三世界と先進国との認識のズレ

——第三世界の側から、先進国のお前たちは自分たちで独自の闘いを組みめというような逆のつきつけはなかったんですか。

奥田 私たちは、買春観光とか国籍法に関する分科会をもったが、第三世界の女の人たちが拒絶するという

ローバルな目で見る視点がなく、部分的なことしかしていないのではないのか。自分が働いている日本の企業が外国へ進出してやっていること、その労働者、ましてや女性がどういう扱いを受けているのか全然知らないのではないのか。

着実な活動の積み重ねを!

第三世界との関係で日本国内を見ると、労働運動にも別な視点が入ってくる。そういう認識が、日本の運動のなかにもっと生かされる必要があると思うが、コペンハーゲンに行った人たちが、大石さんの言ったような視点からもっと発言してくれることを期待したいですね。このことも関連して、コペンハーゲンの今回の会議が、今後にもたらす影響についてはどう考えていますか。条約署名も含めてご意見を。

坂元 だまって待っていても別に何も影響はない。それだけでは何も変わらない。

奥田 条約とか行動計画はすべて絵に描いたモチだからね。それを本当のモチにして食べちゃうかどうかはすべて、自分たちの力量にかかっていると思う。

松井 日本の中で運動をやっていくときに、いかに会議の成果を生かしているのか、これは運動を担う側の力

量にかかっていると思う。

——では、「女たちの会」としては、今後、どのようなかたちで会議の成果を生かし、運動をやっていくのか。

松井 私は今回、コペンハーゲンには行かなかったんですが、九月にマニラに一〇日間行きました。そこで、フィリピンにおける日本やアメリカの多国籍企業と関わっている人たちに会って感じたことは、日本の企業について具体的なことは知らない。私たちは日本にいるから、私たちの方が調べやすい面がある。だから、日本で入手できる資料を集めて、向こうの関わっている人たちに提供すること、そういう実質的に役立つネットワークをつくれば、第三世界の側から拒否されたりはしない。つまり、フィリピンの女の人を研究材料にするんじゃないで、フィリピンの女たちの間に、フランスになるようなものを何か提供すること、そういう中で、共に闘っていく姿勢をもつことが必要であると感じた。

奥田 私たちが肌で感じてきたものを機会あるたびに知らせていきたい。坂元 情報は待っていても手に入らないという意味では、自分たちで情報を集める。また、それを提供していくことで、会議でつくったネットワークを生かしていきたいながら、運動

大石 会に限らないんですが、条約をほんとうに武器にできるかどうか、やはり、日本の中だけであってものができあがるというのは考えられない。ある意味では、「外圧」だから、それを日本の女たちがどれだけ武器にしていけるかということですね。特に雇用は大きな問題だし。

五島 英文パンフをつくったり、コペンハーゲンの会議に出席するまでに、「女たちの会」はすいぶん苦労したけれども、一応、その苦労はむだではなかったということですね。会としても、第三世界の女たちの訴えや糾弾を受け止めながら、日本の国内で着実な運動をすすめていきたい。

——どうもありがとうございました。

金大中著
無常の花よ
永遠に

金大中とは日本人にとって何なのか。本書はこの稀代の政治家像を、彼の講演、論文を通じて、あまねく照らしだす。
〈最新講演を収録!〉

定価 1,200円

絶賛発売中!

発行所 株式会社アンヴィエル
東京都千代田区神田神保町3-10
電話 03(261)0618

NGOフォーラムで①

国籍法分科会を開く

奥田 幸

フォーラムの一週目に二回、第二週に一回、前後三回の分科会を持つことができた。人が集まるかどうか心配しながら会場に行って待っていると、みるみるうちに部屋が一杯になつていった。三回を通して、平均して三五〇人ぐらいの人が集まった。

一回目は、まず自己紹介から始める。国の名前と、自国の国籍法について知識があるかどうかを言ってもらうと、約半数の人々が、何故この分科会が持たれたかを理解しており、半数はあまり詳しく分らなかった。

日本の国籍法の問題点を、世界の国籍法の中で位置づけることから始めた。つまり生地主義に対して日本は血統主義をとり、しかも母系に対して父系をとっている。そしてその原則が女性の国籍を子に伝える権利を侵害しているという事実を説明すると、それに対して各国の例が活発に紹介され、ようやく分科会の真意が全員に理解されたようであった。

まず、イタリア人の夫を持つアメリカ女性が立ち上がり、イタリア法における外国人妻の地位とその問

題点を紹介した。イタリア政府は外国人女性がイタリア男性と結婚すると同時にその女性の元来の国籍を認めず、イタリア国籍をもつものとなす。そのような結婚から生まれる子は、当然イタリア国籍となる。結婚がうまく運んでいる間はよいが、ひとたび離婚ということになると、外国人女性は子供を連れて故国へ帰ることはできない。イタリア政府が「イタリア国籍の子供たちを自国から連れ出すことを許さないからである」。

他方イタリア女性は、外国人男性と結婚すると同時にイタリア国籍を失う。外国に住んでいたそのような女性が、離婚してイタリアに帰国しようとする、彼女自身も子供もイタリア国籍を持たないので、移民がイタリアに定住する場合と同様の手続きが必要である。現在のように移民の志願者が増大していると、入国には困難を伴う。このような、女性の基本的な人権を無視した国籍法を改正しようと、外国人妻たちはイタリアのフェミニストグループと協力しつつ運動を進めている。

これに対して、デンマークの移民の問題に関心をもち、実際に国籍法改正の過程などに参加してきた女性、多くの移民労働者を国内に持つホスト国の国民としての立場から、いかに国籍法を世界で最もリベラルなものに変えてきたかを説明した。デンマークは現在、父母平等血統主義を採用している。

モーリシャスの法律家であり、かつ国会議員をしている女性若い野党議員が立ち上がり、子の国籍に関しては女性も男性と同等の権利を与えられてはいるが、モーリシャス人女性の外国人夫の居住について、モーリシャス人男性の外国人妻に比較して困難であることを伝えた。

これらはその他にも数多くの多様であった各国の国籍法の投げかける問題の一部である。個々の事例はかなりその国によって異なるが、よりよい法律(男女平等、子供の国籍への権利の尊重を原則とする法律)を目ざすためには、相互に情報を交換する、特に法改正への手続き、運動の方法論、法律の詳細などの情報交換が不可欠であるとの共通認識が分科会全体に生まれ、世界的ネットワーク作りの等一步として互いの連絡場所のリストが作成された。第一弾として、デンマークの出席者が、改正された国籍法の詳細、運動の方法、改正の

手続きに関する資料をイタリアの運動体に送ることを約束した。

三回目の分科会は、これらの将来のネットワーク活動の展望がその主なテーマであった。相互協力が確認され、将来への明るい展望のうちに別れを告げ、参加者たちはそれぞれの国へ帰っていった。彼女たちは今、自分たちの国で新たな運動を展開させているに違いない。

注1 生地主義=生まれた地によって、その地の国籍が取れる。

注2 血統主義=生地にいかかわらず、親の国籍によって子の国籍が決まる。

注3 母系=母の国籍によって子の国籍が決まる。



各国の女性記者たち

買春観光分科会を開く

大石まゆみ

十日間にわたって開かれた民間会議の第二週目に入った二、二二日と二回(各回二時間)にわたって、会員のYさんの積極的な手配のおかげで、買春観光の分科会をもつことができた。会議もこの頃になると会議期間を通して参加する人たちが、またその中でも特定のテーマに関心のある人たちが、と顔ぶれが決まってきた。変更に変更を重ねるスケジュールや部屋番号、そして一回はボリビアのクーデターに抗議するデモと時間的にかち合うなどの混乱にもかかわらず部屋が満席になる参加者が集まった。

会にはYさんとアメリカ人の社会学者でフェミニストのK・バリー(彼女はその前の週に「国際的人身売買」というテーマで売春を含む女性の性的搾取全体に取りくんだ分科会をもっている)の二人の司会ではじめられた。

日本男性の買春観光ツアーがどのようにに組まれ、どのような形で送りこまれるのかという点に関心が集まり、これに対し参加者の一人で日本在住のある外国人女性から仕事で韓国やフィリピンへ行ったときの体験をも

とに日本男性の特異な行動について説明があった。観光産業はその国に外貨をもたらす、と一般的に信じられているが、この点についてバックツアーがどれ程わずかなお金しか現地に残さないか、そのしくみについてYさんから説明がなされた。分科会と前後して地元デンマークの新聞をはじめオランダ、オーストラリア、ノルウェーなどの報道関係者からインタビューを受けたが、その際にも私たちは買春観光は単に日本男性のモラルの問題だけではなく、それを許容している日本の女たち、そしてその両者の関係の問題、日本人の根強いアジア蔑視の問題、南北問題、などの側面から訴えた。それに対して「あなたたちは具体的にどんな活動をしているのか?」という質問もよく聞かれた項目のひとつだった。

参加者にはデンマークのフェミニスト達、アメリカ政府代表で国連の婦人の地位委員会代表、反奴隷協会の代表(男性)、デンマークの麻薬犯罪取締り担当の教育省の高官(男性)、セイロンの売春婦更正施設の責任者、アメリカの売春婦権利擁護組織コヨ

ーテの代表、フランスの高名なフェミニスト、スウェーデンで売春婦の権利のために活動している人、売春婦を組織しているイギリス人などがあつた。また二回の分科会を通して熱心にテーマをとっていたデンマークのフェミニスト(文化人類学者)の姿も印象に残っている。

分科会の討論は以上のようなさまざまな参加者を反映して、日本の買春観光から買春をめぐめる法律問題にも話が及び、買春をする男の側を規制する法律(スウェーデンでは立法化の動きがあると別の分科会で聞いた)は売春婦に対する恐喝を増やすだけで反対だ、という意見、また現に売春婦をしている女性達の生活をおびやかさないための法的改正についての意見などもあつた。前述のK・バリーからは、戦争中の従軍慰安婦を思い起こさせるようなバリーのある売春婦の話もあつた。

このように当面の問題の取りくみ方には差はありながらも、女性が売春をしなければならない現状、そして女性が性的に搾取されていることに對する怒りは参加者全員の共通認識であり、男性と對等の社会的経済的地位を獲得し、女性としての性がおびやかされずに私たちが生きていける社会を創らない限り真の女性解放は、あり得えないとの認識を新たに



ボリビア軍事クーデターに抗議する女たち

西ドイツの女たちと第三世界

寺崎 あきこ

七〇年代に入って中絶禁止反対運動をきっかけに活発になってきた西ドイツの女の運動の中で、第三世界の女たちとの連帯の方向を探ろうとする動きが目立ってきたのは一九七五年以降のことである。

二年ぶりに西ドイツを訪れて一月という短期間の滞在中に、まだ女の運動の中の少数派ではあるが、在独外国人(七三年現在でトルコ、ユーゴ、スペイン、ギリシャ、イタリア、韓国等在独外国人女性は約百万人)および広く第三世界の女たちと連帯する方向を模索している西ドイツ女性に接する機会が何度あった。

九月末に西ベルリンで開かれたコペンハーゲン会議報告会でも、西側工業国に住む自分たちとアフリカの女たちとは抱えている問題が「余りにも違う」という現実の中で、いかに国際連帯をつくり出しているのかという点に議論が集中。会議参加者の一人は、欧米女性の間から激しい批判が浴びせられたアフリカのクリトリス切斷の慣習も彼女たちのかかえている水や食糧、医療などほかの切実な問題と切り離れたところ

で、欧米のセクシュアリティの概念だけで批判しては文化的帝国主義になりかねないと発言した。

老人問題のワークショップで東アフリカの女が、子どものいない女が年をとれば乞食になるほかない自分の国では老人問題と一口で言っても欧米のそれとは全く違う。ここではまず欧米の老後保障の実態を知り、それがどのように達成されたかを学び、それを参考に自分たちの社会に合った変革の道を探していきたいと語ったという。西サハラから来独した女性たちが、女のクリニックに案内され、スベキラムを使う自己検査の方法を知って自分たちの国ではまだ当分医者不足が続くだろうが、この方法を使えば自分たちでもできると目を輝かせていた、とは彼女たちの世話をした女の発言。またインドでフェミニスト雑誌「マヌーシ」の編集にたずさわる女と話しあって、女たちの間の支配関係をどう打ち破っていくか、グループで作業する場合の問題点など、お互いに全く同じ問題をかかえていることがわかったなど、欧米の女の運動の中で追求さ

れている課題をいかに第三世界の女たちと共有していくかを考える具体的手がかりもいくつかあげられた。

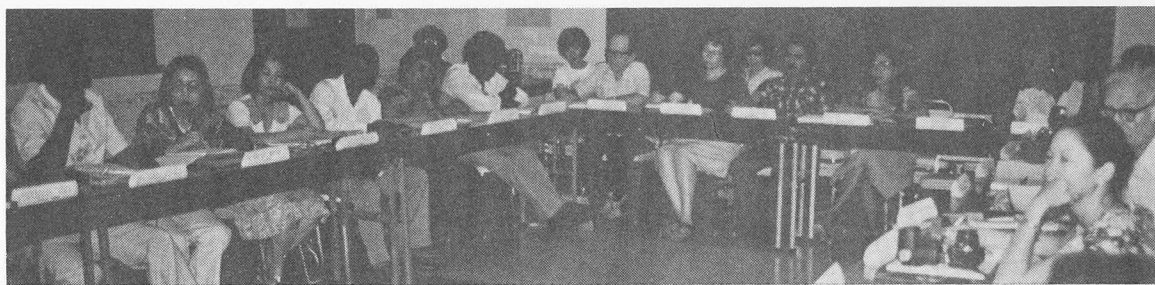
アフリカの女が国内で自分の部族が受ける抑圧についてと共に、女の子として自分が受けた抑圧について語るのを親しく聞いたことから、国際的に共通目的に向かって共同の戦術を議論するようになるまでにはまだ時間がかかるが、その第一歩として個人的コミュニケーションの機会をもつと多くつくり出すことが大切という発言も印象に残った。私自身もフランクフルトのブック・フェアでアフリカの女たちと話す機会に恵まれたことから、それまでとても遠い抽象的存在だったアフリカが急に身近に迫ってきたのを感じた。

西ドイツでは女性学の分野でも、第三世界と女たちというテーマは着実に根をおろしてきている。一九七七年に設立された「女のための社会科学研究所と実践」学会の論文集第三号も「女たちと『第三世界』」がテーマ。その巻頭に「外見的には第三世界の女たちのおかれている状況は私たちのそれと全く異なっているようにみえても根本的には共通であり、彼女たちの状況を知り、自分たちのそれと比較することによって、私たちのおかれている状況もより鮮明になり、闘いの共通目標を知る新たな

可能性が開かれてくる」と述べられている。

九月末から一週間西ベルリンで開かれた女のための夏期大学でも「在独トルコ人女性」「職場で二重に差別される外国人女性」「イスラム社会の女性」「中央アフリカの女たち」「南米における女性差別(集団創作劇)」等のセミナーがあつた。

西ベルリンにある女のための研究・教育・情報センターでは毎月第一木曜に「第三世界と女たち」と名づける集りを行っている。今年五月に始められたばかりであるが、毎月約五十人の女たちが集まってきて、情報交換、具体的な行動提起をめぐっての討論などを行っている。大多数はドイツ人女性であるが、西ベルリンに住む外国人女性も情報やコンタクトを求めて集ってくる。私も十月の集りで、富山妙子さんの光州事件をテーマにしたスライドを紹介したり、日本女性の状況やアジアの女たちの会の活動について話す機会をもった。西ベルリンやフランクフルトで開発国援助行政に携わる女性たちが、これまで欠けていた女性解放の視点を開発国援助計画に取り入れさせようと活発に働きかけているのも、女の運動の地道な広がり的一端を物語るものであろう。



マニラ・観光問題ワークショップ報告 高里鈴代

九月十二日、観光問題ワークショップに参加するためにマニラ行きの飛行機に乗り込んだ私は、改めてその乗客の男性率90%以上に驚き、下り立ったマニラ空港での、それらの男性客を迎える、おびただしい数の現地旅行社の呼び声と、ツアー名を書いた小旗の波に驚かされた。

今回のワークショップは、国連の専門機関である世界観光機構(WTO)が、初の世界観光会議をマニラで開催し、「観光促進」のテーマの下に、観光を積極的に捉えて協議することを知って、アジアキリスト教協議会が、受け入れ側、特に第三世界に現実に生じている観光のマイナス面を、同じマニラで、世界会議に先がけて開催したものである。

私たち、「アジアの女たちの会」が取り組んできた「買春観光」は、国際観光のマイナス面の一つであり、しかも、ここ一、二年に急速に伸びた日本人によるフィリピン買春観光の問題にメスを入れるためにも、今回の開催地設定は、まさに時を得ていたといえる。

ワークショップへの参加者はマレーシア、香港、スリランカ、日本、そして地元フィリピンなどのアジアの他に、太平洋諸島のフィジー、トンガ、アフリカのケニア、中央アメリカのトリニダード、アメリカUS

A) など十八カ国から三〇名(男性二三名、女性七名)各々の国で観光問題に取り組んできた観光機関の専従者の他に、弁護士、大学教授、ソーシャル・ワーカー、労組活動家、ジャーナリスト、編集者など多彩な顔ぶれであった。

二週間のワークショップは、四つの段階に構成され、その第一段階として、参加者は到着する五つのグループに分けられ、三日間の体験学習の小旅行に送り出された。私達(松井・高里)はマニラグループI、IIに参加して、都市中心の観光関連施設(ホテル、会議センター、文化センター、ナイトクラブ、フィリピン大学観光学部など)の豪華、超一流の官民一丸となった観光政策を見学した。

他方、最低賃金生活にあえぐレストラン従業員のアパートを訪ねての話し合い、あるレストランの従業員たちが組合結成の賛否を決定する集会を傍聴したり、ナイトクラブやゴーダンスクラブでライセンスを持つて働く女性と、わずかな時間ながら声をかける機会を持ったり、この現場検証の三日間は、実に衝撃的な体験だった。

ワークショップの二つ目の段階は、体験学習でフィリピンの現状を踏まえた上で、フィリピン政府サイド、および民間観光業界代表から観光の

意義、促進計画等について聞くことであった。フィリピンの観光の奇蹟と第三世界諸国から注目を集めている背景、観光の意義について、講演者は異口同音に、第一を外貨獲得、第二を経済振興・雇用促進、第三を文化交流・国際親善であると力説した。さらに、フィリピンとしての観光客受け入れ能力を、現在の約百万人から倍の二百万人として、より積極的に観光地の拡大、ホテルおよび空港建設、また観光産業への指導者、管理職人材の養成充実などを強調した。実際、外貨獲得第三位の観光収入の六〇%は観光事業に再投資しているのである。

どの講演者も、公式には、観光客相手の組織売春については一切否定するが、質疑応答の中では、特に日本人の集団買春観光のあり方と、それを送り出し、逆に収益を得ている日本の旅行関連産業のあり方に批判的な発言があった。

さて、ワークショップの第三段階である。各国からの現状報告に入ると、先の講演者達が力説した観光の意義は、それがいかに神話であったか、一つ一つ崩されていった。特に現地フィリピンの報告は、政府サイドの「観光の奇蹟」の観光発展の裏で、人々の七〇%は最低の貧困状態の中で苦しみ、厳しい戒厳令下で基

本的人権も奪われ、獲得したはずの外貨も、実際には人々の生活の向上に向けられず、逆に先進国の多国籍企業と一部巨大資本家に吸い上げられている。

また、現在のような、北の先進国から南の開発途上国への、経済格差の故に行なわれている一方的な観光の流れは、対等な文化交流とか国際親善とはおよそかけ離れたものである。受け入れ国の自然環境の破壊、伝統文化の商品化・身売りを引き起こし、伝統的宗教行事の内容の形骸化が生じている。(インドネシアのケチャ、バプア・ニューギニアの火の祭りなど、多くの例がある)。

特に、買春観光は、政治・経済・文化・社会のすべての面にかかわる構造的な問題であり、日本と他のアジアの国々との関係を象徴的に表わしており、売・買春観光が、決して二次的な問題ではなく、むしろ中心的な問題であるとの共通認識が、二週間のワークショップの間に次第に認識されていった。

このような共通認識に至ったのは、フィリピン側の調査報告と、私たち、女たちの会、の英文パンフなどを通しての訴えによるものでもあった。そして、参加者達は、ワークショップの自由時間すら、自発的に日本人専用といえるラマダホテルの

ロビーで日本人観光客の状態を観察したり、日本人専用のクラブから来た女性達が、ホテルの従業員通用口を利用するというシステムを、実際にホテルの裏側にまわって確認したり、また、私が実際にホテルに宿泊して、内側から売春の仕組みを知り得た経験も、即座に他の参加者に図解入りで報告して、参加者全員がさらに認識を深めていった。

ワークショップの第四段階は、グループ討議であった。最後の二日間、政治、経済、文化、社会、教会の四つのグループに分かれ、独裁政権下の戒厳令など(政治)、多国籍企業、雇用問題など(経済)、伝統文化の崩壊や売春問題など(文化・社会)、教会の社会的責任など(教会)を討議し、各々が、問題点、今後の課題提案などをまとめた。

文化・社会グループでは、具体的などんな改善策があるかを考えるなんて無為に等しい。現にある極端な経済格差の前に、一体何の改善策が可能なのか。むしろ、一切の観光を拒否したい気持ちだ、とフィリピン代表の女性は、受け入れ国側の苦悩を激しい言葉で表わした。

ワークショップの声明文の中には、日本人による買春観光の現象は、かつてのアメリカ軍事基地依存の基地

売春の土壌から、容易に生み出されているとの、両者に対する鋭い批判が明記されている。

今後の課題の一つとして、観光の問題別のネットワーク作りおよび調査研究の継続のために専門機関をアジアキリスト教協議会の中に置くことになった。特に買春観光については、フィリピン、タイ、韓国、台湾、そして日本のネットワークを早急に作ることに申し合わせられ、私は、緊急な課題を負って、ワークショップから押し出されるようにして帰国した。

ワークショップが終った翌日の夕方、バリオ・パラヤンというスラムを訪ねた。薄暗い電灯の下で、母親と四人の子供が、ビーズのような細かい貝に糸を通すネックレス作りに夢中になっていた。母親は二日に十二時間も働き、四才、五才の女の子も含め、子供達も一日のほとんどの時間をネックレス作りで過しているという。手間は、一つにつき十センチタポ(三円)だが、なんと、マネージャーのマネージンと同じく十センチタポ。材料のある日は一日に三百個作らなければならず(九百円)、そのために十四時間以上働くのである。私と友人に一本六十センチタポのコーラを五才の子供に買わせてもてなしてくれたが、二人の十二個のネックレスの労

賃を数分間で飲んでしまったことになる。

作られたネックレスは、観光みやげ店で約十ペソ(三百円)で売られていた。そのスラムでは、ほとんどの家で、学童時の子供から、職の若い青年たちまで、全員がネックレス作りに夢中だった。しかし、中間のマネージャーになるためには三千ペソの保証金を卸元に入れなければならないということ、搾取の構造は明らかである。

その翌日、世界観光会議の開会式が会議センターで、美しい民族衣装の女性の立ち並ぶ中、百十二カ国代表の参加で華やかに開かれた。私も、ワークショップのメンバー五人と共に傍聴した。観光の奇蹟を誇る正面壇上のマルコス大統領、イメルダ夫人、アスピラス観光大臣。各国のメッセンジャーの中で、ある国が、フィリピンを讃え、観光発展の象徴的存在であると読み上げたとき、観光関連産業の末端にいる、前の晩に会ったスラムの親子の顔が浮んだ。





'80夏の合宿

今年で四回目の夏の合宿が、八月三十日から九月一日にかけて、全国から集まった五十数人の女性会員と九人の子供たち、それに託児を引き受けてくれた男性の協力者一人を加えて、箱根で開かれた。

夏の合宿は、いつも仕事や時間に追われながら運動をしている私達にとって、日頃の思いをことごとく話しあえる場であり、地方の会員にとっては、親しく顔をあわせて語りあえる年一度の機会である。第一夜の夕食後、会の活動報告に続いて始まった自己紹介は、延々三時間近くもかかってしまった。語りたいこと、表現したいこと、伝えたいことをみんながいかにたくさんかかえているのかを、お互いにあらためて感じさせられることとなった。続いて、七月にコペンハーゲンで開かれた国連世

界婦人会議に出席した四人の会員から会議の報告があった。この報告については、別項を参照されたい。

合宿二日目の午前中は、この一年間とりくんできた買春観光の総括と九月にフィリピンのマニラで開かれる世界観光会議にむけての行動提起の討論にあてられていた。昨年の夏の合宿から買春観光を年間テーマとし、公開講座「女太学」では十回のシリーズでこの問題にとりくんだ。そして、アンケート調査、機関誌の発行、劇にして演じる等の過程で、買春観光が、南北問題であり、国際収支の面で石油に次ぐ重要な位置を占める巨大産業として成立しているという現実を直面せざるを得なかった。大衆レジャー時代をむかえて、このような国際観光は、成長産業として、今後ますます多くの投資を受け、巨大空港・ホテルが建設され、航空会社は、便をふやし、旅行業者は、パック旅行への客のひきよせにやっきとなる傾向が強まっている。そして、買春観光は、スリランカやネパールの奥地まで広まっていく。この一年、この問題について知れば知るほど、我々の前に立ちちはだかる巨大な構造にどこから手をつけていいのか焦りという立ちを感じざるを得なかった。それと同時に、そのような巨大産業を成り立たせ、そのはずみ車となっ

ているのが、日本の家庭の男と女の関係のあり方であることが団地の主婦などを対象としたアンケートで明らかになってきた。だから私達は怒りをもって巨大な政治経済的構造に立ち向かっていかなければならないのと同時に、辛抱強く自分達の立っている生活の足場、根元的な男と女との関係を変えていかなければならないということになる。年間テーマとしては、一応終つても、フィリピンの会議の経過をふまえて、今後もこの問題を引き続き追求し、行動をおこしていこうということが確認された。二日目の午後は、今回からはじまる年間テーマ「くらしの中のアジア」について野村かつ子さんの講演があった。野村さんは、消費者運動の草の存在であり、明治生れとは思えないほどの気迫で、国内の問題しかみていない日本の消費者運動の質を変えていかねばならないと強調した。現在の消費者運動は、今日の日本の豊かさが誰を収奪し、蹂躪することによって得た豊かさであるかというところを全く問わず、国際的視点がない。ところが商品をつくっている多国籍企業は、国内ばかりに市場を持っているのではなく、世界市場をねらっており、日本で禁止されたポリコットされた商品を東南アジアで売ろうとしている。

合成洗剤や農薬がその例である。粉ミルクやバナナの問題も出された。粉ミルクは、先進国の出生率低下と母乳見直しのため、ネススル社などが開発途上国への猛烈な売り込みをはかっており、衛生状態が悪く、文盲の母親も多いこの地域で、たくさんのお子さんたちが死ぬという結果をひきおこしている。われわれとしては、日本の乳業メーカーが、東南アジアで何をしているのかを調査する必要がある、粉ミルクの問題を女性解放の視点から、女性の運動としてとりあげていくことが提案された。バナナについては、合宿中に「人を喰うバナナ」というスライドをみて、私達の口に入るバナナの八〇％を占めるフィリピン・バナナを生産している農民労働者達がいかに非人間的苛酷な労働条件の下にあり、生産の過程で日本では禁止されている多くの農薬が使われているかを知り、今後運動をどのように進めていったらよいのかについて話しあった。その他、ピルや薬品、エビ、木材、味の素、反原発問題などが出され、私達のくらしの中からアジアとの関わりを探る作業をはじめることになった。

(不破真理)

ひろば

今年七月に開かれたコペンハーゲンでの国際女性民間フォーラムで、皆さんの機関誌三冊をはじめて手にして、その内容の率直さに感動し、アジアの女性の問題をより徹底した形で提示していく必要性を痛感させられました。ユネスコと提携している情報ネットワークのサービス機関で働いていて、女性に関する情報の流れに力を入れています。皆さんと共通した目的をもっていると思います。私共がアジア地域を網羅した情報活動をしようとする際、貴グループとの交流を抜きにしては不完全なものとなってしまいます。今後の情報交換、交流に期待します。

(マニラ・E・M・M)

在米愛国女性同友協議会は、朴政権時代にアメリカ・カナダ在住の韓国女性によって組織されたグループで、「女性同友」と題する機関誌を出しています。この機関誌一〇号に次のような「アジアの女たちの会」の紹介が掲載されました。

* * *

日本の女性解放のため戦っている「アジアの女たちの会」は組織されてから数年にすぎませんが、彼女たちの業績は本心に驚くべきものがあります。機関誌の他、ニュース・レター、英文機関誌など多様な出版物を刊行して、大衆啓蒙に主力をそそぐだけでなく、特に年々行事として、買春、キーセン観光の実態、構造などを明らかにする学習講演会を開いています。次のものは、今年の夏の講座の宣伝文です。

(埼玉、M・S)

彼女たちはまた、アジアの弱小国の農業、女子労働者たちの労働実態を視察し、不条理な待遇を改善させるため世論を喚起しています。

* * *

かねてより、アジアの国々、アジアの人びとに対する日本、日本人の公的、私的なやり方に心を痛めておりました。アジアの女性に対して、同じ女性として、その屈辱を共にしてきました。私が日本で受ける以上の屈辱を受けているアジアの女性たち。その原因が我々日本人にあるとしたら心から申し訳れなく思います。心から恥かしく思います。加害者の日本人として、私たち女性の、アジアの人々の真の尊厳を守るため何かをしなくてはなりません。教師生活三年目に入りました。(略)

活動報告

(1980年8月～12月)

- 8・16 コペンハーゲン会議報告 奥田 幸、大石まゆみ、五島昌子、船橋邦子
- 8・30 「暮らしの中のアジア」をテーマに箱根で合宿。講演 日本消費者連盟 野村かつ子さん
- 9・17 「国籍法改正」を要求する集会。衆議院議員土井たか子さんがスピーチ
- 10・11 マニラ観光問題ワークショップ報告 高里鈴代、松井やより
- 東南アジア旅行報告 遠野はるひ
- 10・15 女大学〈第三世界と女と暮らし〉「エコロジーの視点から」綿貫礼子「東南アジアの旅から」遠野はるひ
- 11・8 米国生活一年の報告 坂元良江 西ドイツ訪問報告 寺崎あきこ
- 11・19 女大学〈フィリピンバナナのこと〉「バナナ農民の闘い」フィリピン人労働者「フィリピンに留学して」柳田郁子
- 11・29 「'80 買春観光に反対する集会——女の怒りを行動に!!」(国会会館)
- 12・7 「女たちは戦争への道を許さない! 女たちの集会」(東京山手教会)に参加。
- 12・11 集会「金大中・光州そしてわたしたち」安江良介氏の講演「金大中氏の生死・日本人として考える」スライド「倒れた者への祈禱」(富山妙子ほか作)
- 12・17 女大学〈インドネシアの日系企業と私たちの暮らし〉講師 内海愛子・村井吉敬

田中 宏

日本のなかのアジア

留学生・在日朝鮮人・「難民」

李恢成氏推薦—この書の誠実さは、アジアの人間と平等でありたいと欲している日本人民衆の願望を体現し…日本政府による行政差別と偏見をものがたっている。朝日新聞書評—難民問題などの根源は日本国内にあることを指摘し…一読の必要がある本。 1800円 160

大和書房

東京都文京区関口1-33-4 〒112 電03(203)4511 振替東京6-64227

勁草書房

東京都文京区後楽2 振替東京5-175253

内海愛子・村井吉敬
赤道下の朝鮮人叛乱
抗日叛乱、インドネシア独立戦争への参加等。一七〇〇円 250

加藤邦彦
一視同仁の果て
日本の戦争に加担させられた台湾人達の記録。一五〇〇円 250

井上輝子
女性学とその周辺
女性をめぐる問題状況をめぐり、方向を考える。二〇〇〇円 250

川島・木下・坂本・小坂
女の自立
がんばり三人女の戦後史。女の自立を考え、連帯を呼びかける話題の書。一四〇〇円 250

田中 宏
日本のなかのアジア
留学生・在日朝鮮人・「難民」
李恢成氏推薦—この書の誠実さは、アジアの人間と平等でありたいと欲している日本人民衆の願望を体現し…日本政府による行政差別と偏見をものがたっている。朝日新聞書評—難民問題などの根源は日本国内にあることを指摘し…一読の必要がある本。 1800円 160

ASIAN WOMEN'S LIBERATION English Edition Now Available!

- No. 1. Asia and Women's Liberation
Declaration by Asian Women's Association,
Human Rights in south Korea.
- No. 2. Japanese Economic Invasion
in south Korea, Taiwan, and Southeast
Asia; Proposed Revision of Japanese
Nationality Law to give Japanese women
the right to transmit their nationality to
their children.
- No. 3. Prostitution Tourism
Viewed from south Korea, Taiwan, and
Southeast Asia.

Price: Inside Japan No.1 - ¥300,
No.2, No.3 - ¥400.

Address(for Order):

Asian Women's Association
Poste Restante
Miyamasuzaka (Post Office)
Shibuya-ku, Tokyo, Japan

女大学 「暮らしの中のアジア」

毎月テーマにそって行なわれています。

場所：渋谷勤労福祉会館

日時：毎月第3水曜日午後6時30分

「買春観光」に取り組んでいる

フィリピン・台湾の活動家にカンパを

11月29日、「買春観光に反対する集会」でマニラや台湾の実態が生ま生ましく紹介され、「売春」をせざるを得ない彼女たちの社会復帰の為に現地で活動をしている女性のグループや、キリスト者のグループができていたことも報告されました。

会場カンパを訴えたところ、四万三千円余りのカンパが寄せられました。「会」として会員のみなさんにカンパをつのります。買春観光に反対するささやかではありますがシスター・フッドを築きたいと思います。

送り先・振替、東京〇一四六一四三

「アジアの女たちの会」あて

(「買春観光」カンパと明記すること)

光州・三つのメッセージ

■画集『倒れた者への祈禱——1980年5月・光州』

絵：富山妙子 構成：及部克人 題字：木村三山

定価：800円/レコード共1,300円

■レコード『倒れた者への祈禱』

作曲・ピアノ演奏：高橋悠治 定価：600円

■スライド・絵と音楽のコンポジション

『倒れた者への祈禱——1980年5月・光州』

絵：富山妙子 音楽：高橋悠治 撮影：内海成治

定価：17,000円 貸出し料：5,000円

*

発行：東京都世田谷区桜丘4-16-2

火種プロダクション TEL 03 (425) 6095

編集後記

厳しい状況のアジアの女たち、そして自分が日常の中でどう闘うのか、そんな想いが伝わりますか。(Y・T)

機関誌編集、集会の準備。最終電車に乗る日が続きました。討論する時間が欲しいな!! (H・T)

なだめたり、すかしたり、どなったりやっと年内に間に合いました。私、運び屋かしら。(須田)

正月休みにスミからスミまで読んでらおうと頑張りました。タクシー代と寝不足に悩み、手伝ってくれる人を求めます。(M・G)

人民の沈黙

——わたしの中国記——

松井やより

周・毛の死に始まる激動の時代、北京で生活した行動派女性ジャーナリストの体験的中国論。革命30年、民衆に沈黙を強いる体制を問い、民主と人権を求めて闘う中国人との連帯を訴える。独得の鋭い観察と温かい感性がいま初めて伝える中国の実像。 四六判上製/382頁 1,800円

すずさわ書店・東京都新宿区矢来町56 振替東京3-138354

朝を見ることなく

徐兄弟の母 呉乙順さんの生涯

オモニは 今では私たちみんなの肉となり血となつてともに生きておられます
しかし 最期に医師先生が
「朝まで辛抱すれば楽になりますよ」と言われた時
オモニは「朝まで……しんどいな……」とおっしゃってそのまゝ
朝を見ることなく逝かれたのですね
どうして お待ちにならなかったのですか?
朝まで…… 朝まで……

——徐勝——

定価 1,200円

編集発行 呉乙順さん追悼文集刊行委員会

京都市下京区仏光寺通堀川西入 西村誠気付

振替 京都42838「徐君兄弟を救う会」